

灰色魔女のアトミック  
ウェディング

氷川螢

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ストライクウィッチーズの世界へ転移物として。

世界をまたいで別次元に飛ばされるのは何も少年少女だけじゃない!!

でも、そこにいる主人公達と年の差がすごかったりしたら……どんな恥ずかしい思いをするのかな？

今年で三十三才になる結婚適齢期瀬戸際OL小林敦子と、可愛らしいウィッチーズ……運命は悪戯でいっぱいだ!!

そんな遊び心をつぱい膨らまして書いてみました。

# 目次

夢に溺れて……浮かれて現世？	1
飛びたい乙女……現実の錘	24
空に行くには？……まず服を脱ぎます	46
猛きウィッチの激戦……非凡な敦子の防戦	75



# 夢に溺れて……浮かれて現世？

小林敦子。

平凡極まりない名前を持ち、ベテランの称号お局間近、今年32才の彼女は遠い目で過去に飛ぶ妄想の中にいた。

子供の頃の夢は魔法少女になる事だった。

ヒラリヒラリと空を舞い、ステキなポーズで悪を倒す。

普段は普通の女の子なのに、ひとたび事件が起こると華麗に変身。

煌めきの衣装は星を飾るピンク、フレアいっぱい اسکートと宝石を飾った指先、変身によってなんだかわからないけどピンク色になった長髪を靡かせて悪を打つ。

その姿に、あこがれの男子が心をときめかせる。

「そう、そして私は本当の自分を言えなくて……切ない思いを抱えながらも世界の為に戦うの」

給湯室の狭いスペース。

100均で買ったピンクの三角コーナーにたまる茶渋の出し殻を纏めてゴミ袋に入れた後、アンダーリムの眼鏡をかけた敦子は呟いていた。

「……黒のレース、もいいわね。女の魅力をかきたてる。なのに成熟には遠い少女……そう魔法少女。契約とかダークな方向は無しで、いつだって神様は正義を行う少女の方。私はいつだって世界を守って……世界中の人に愛されるの……」

正体は証せないけど、世界を愛しているの。

貴方の住む世界を守ると、悪を退治するステキな武器で。

魔法のステッキ、魔法の指輪、最近なら魔法の矢というものもある。

戦うのに必要ない華美な装飾、薔薇や花、ハートや鳥のような羽。

美しく可愛く、世界のために働く私。

妄想は実物の敦子の頭を破裂させる寸前まで膨らんでいた。

うつとりと、両手で自分の頬を可愛く支えるポーズ。

給湯室、一畳ない個室はピンクの夢がぎっしりつまった妄想アイランドと化していた。

「小林さん、私先にあがりませうねー、彼氏と待ち合わせしてるんでえー」

「……お疲れ様、表の戸締まりはオツケー?」

「はいはいオツケーです、さよならー、また明日ー」

V〇5の過激変身スプレーを振りかけ、髪の毛をフワフワのクルクルに巻いた同僚が背中の方を過ぎていく。

膨らんでいた夢ははじけ飛んで、一気に寒々しい現実の中に落とされる。

ここは会社の中でも北側に面した、灰色壁の給湯室。

事務所の裏口に直通の風通しの良い現実社会の窓口、表の自動ドアとは落差大きな世界。

夢に針を刺され唇を歪める敦子の後ろを行く小太りの同僚。

名を村田月下美人（むらたはにい）。

DOQフォーエバー、ありがとうございます。キラキラネームの豚は、餅を突き落とすような鈍くて重い足音で歩いて行く。

鼻にきつい香水を漂わせて。

中肉中背、抱き心地はいいのかも知れないが美的センスは壊滅的。

今時魚礁網でもないのに格子のデザインが入ったストッキングに、膝上10センチのタイトスカートはインチキの黒革、目の周りはいったい誰にぶん殴られたの？ そう聞きたくなるような黒の隈取りと瞼の上の青いシャドー。

どこの村のキュー〇イーハニーだよ？ 町ではなく村おこしのために存在するハニーか？ バニーちゃんか？ お前は何なんだ？ そう突っ込みたくなる女を冷めた

目の後ろ頭で見送る。

「あんな女のどこがいいのよ……」

それでも付き合う男がいるという現実の壁の前、婚期逸脱確定コースに入りつつある敦子は黙って背中を見送っていた。

事務所に詰める野郎共の湯?みを洗い終え、水切りをして指先をソフトに拭く。

30越えると体から水分は簡単に消えていく。

みずみずしかつた指先でさえ乾き皺を増やす、だから水仕事をして少し潤った気分の手をしっかりと拭いてしまいたくない。

気怠く緩い足取りで誰もいなくなった事務所に戻り開いていたパソコンを閉じる。

女が一人……

事務所を閉める最後の社員が、夜遅い時間の戸締まりに女一人とか……正直女扱いをされていない。

「夢は魔法少女になる事……魔法が使えたら……ポンツと貴方の所に飛んで……」

妄想はそこで途切れ、大きなため息を落とす。

「三十路女が自分から会いに行くなんて……そんな事したらドン引きだよなー、やっぱこう、迎えに来て貰うぐらいの……貫禄ないと……」

まだ疲れて顔が俯く時間ではないが、自分のお高い態度シミュレートに嫌気が差す。

19時、夜はこれからという時間の中で、妄想とは別の現実の思い出が頭の中をよぎる。



心がポツキリ、上半身ごと机に顔を擦りつける。

「私のどこがダメなのよ……あんな小太りの女に男がいるのに、私は長くつきあつた貴方から逃げられそう……」

逃げられそう6年付き合つた彼氏、井上徹に。

年下の徹は最近敦子に会おうとしない。

出会いはスローモーション、取引先の会社から新人イラストレーターとして挨拶にやつてきた彼。

端正とは遠いお笑い芸人系のライトフェイス。

だけど体格に緩みがなく、むしろ痩せすぎで心配を誘発させる大きめのTシャツに羽織られた青い果実はその時22才。

そこからエスカレーション、簡単には食べられない貧乏イラストレーターの彼のため  
に手取り足取り腰取りで、社会人として疎すぎる部分を補い、食べられない生活を自らの薄給で支え、果ては男として一人前にまでしてやったのに……最近は電話しても、忙しいのオンパレード。

通り過ぎた脇役の女に成り下がった自分と、卑下の唇がデスクに口紅の跡を残す。

「こんな辛い世の中なら……儂く消えてしまいたい」

縁起でもない事を口走る理由は十分にあつた。

女が30を過ぎるといふ事には色々な重荷があるのだ。

好きな人がいるから待つて……なんて親を説得させるには力の足りない遠い台詞。

見合いをしろだの、合コンで相手を見つけたらだの、何の用事もないのに電話がかかれば必ず上る話題。

父親は地元近所の青年を見つけると、自分を嫁に貰わないかと話題を振る始末だし。

母親なんかは

「私なんて25才で結婚したのよ……26の時にはもう貴女がお腹にいて……」

自分の婚期を上げて敦子を責め立てていた。

両親の心ない結婚しろF5アタックを無視し続けたら、おきまりのお涙頂戴が炸裂した。

「誰だつていいから、早く結婚しておくれ。親を安心させると思つて」

などと、のたまう始末。

着信拒否を一番設定したのは両親だったりというこの世知がなさ。

「あーあ、そうだねー誰でもいいかー。こんな気持ちで結婚して、子供作つて、旦那が浮気して……ダメだわ、破滅への絵図しか思い浮かばない……」

掠れた色合いを引いてしまったルージユ、デスクをティッシュで拭くと、かからない電話を待つのは止めようかと立ち上がる。

今日、会えないかな？

そうメールしたのは朝一だったのに、今の今までメールもない。

「かかってくるわけないよねー、ですよねー、30過ぎのおばさんが何やつてるんだか……」

女が30過ぎて相手もいない人生。

引つ詰めていた黒髪を解き、鼻筋からずれた眼鏡をかけ直す。

携帯にぎって一人で鼓動の波高めてるなんて、波乗り出来ない丘サーファーだよと首を振る。

目を付けた若い燕より、断絶早く古く鄙びていく女……別れは必然？

「死んじやおうかな……」

「一緒に死んでくれ!!!」

半ば夢うつつの独り言に飛び込んだ、硬い石のような声。

滝打つような荒い息づかいが目の前に、包丁持って立っている。

「……わっ、私と一緒にして事ですか？」

「おおおおおう、あんたと」

鈍く光る包丁は穴あきだった。

刺しても切れ味鈍らずすぐに抜けて、連続刺しが無理なく可能なタイプに目が踊る。

なんで、どうして、知らないオヤジがここにいる？

考えるまでもない、裏口は人が出たらオートで閉まるタイプ。だったら表の自動ドアから冴えない半ハゲ頭の中年男は包丁片手に来店したという事だ。

小デブのハニイが戸締まりをおこたった結果はここにある。

しかし、烈火の怒りを顔にだそうものならば速攻刺されそうな危険な距離。

自分のデスクの向かい側に、手を奮わせて立つ灰色ジャンパーで腹の出たオヤジ。

「いや、あの、私は、ほら、30女だし家にペットのハムちゃんが待つてるし……一緒に逝くには向いてないと」

「もおおおお、誰だっでもいいんだよおおお!!!」

「誰だっ……良く無いですよお!! 良く吟味してくださいよ、一生の問題だから」

思わず言い返して後ずさり、結婚だっけ誰だっけいいわけではないが、死ぬのを一緒にするのだっけ誰だっけ言い訳でもない。

当然のことだが一緒に墓に入るのなら好きな人と決まっている、ここで見知らぬオヤジと心中なんてまっぴらゴメンと手を振るが。

狂気の相棒を片手に持った半ハゲオヤジには通じていない。

「誰だっけいいんだ。もう生きていても辛ければかりなんだ、死にたいんだ、一緒に逝ってくれ」

「いやですよ。私だつて辛い事いっぱいなのに生きてるのに、見ず知らずの貴方と死ぬなんて無理絶対」

「うるさいいいいい!!! 俺は決めたんだ!! 今日死ぬんだ!!!」

「私の人生に、特別今日死ぬ予定はないんですけど」

「一緒に逝くんだ。死にたいと言つてたじゃないか」

「聞いてたんですかあ……いやいやいやいや、違うんです、そうじゃないんです、もつともつともつと先の話なんです。ほら私まだ結婚もしてないのに……死ぬないですよ」

「うるさい!! おれだつて結婚してないよおおお!! 結婚に夢みてんじゃねーよ!!」  
「夢見たつていいじゃないですか!! 夢見た罰がこれなのお?」

話しながらデスクに乗り上げ這い蹲つて迫るオヤジの脅威は、すでに目の前に迫つていた。

振りかぶつたままズルズルと挙動不審塊と化したオヤジ。

恐怖から口が何回転も空回りして、何かを話そうとするがまったくうまくいかない敦子。

手を両方前に出して、制止のポーズを見せると。

「ねえ、明日は良いことあるかもしれないじゃないですかあ……」

「良いことあるなら今すぐじゃなきゃ、いやなんだよおおお!!!」

「……今すぐ、包丁捨てたらきつとハッピー……二人共ハッピーになれますよお」

「五月蠅い!! すぐに幸せになる魔法をかけるよ!! じゃなきや死ぬ!!」

「そんな理不尽!!」

落とされる凶刃、真っ直ぐに自分の胸を突く痛みは深く体にめり込んで、真っ赤な花を咲かせていた。

次ぎに訪れる闇の中、閉じた目の中に星が広がりその闇に落ちていく。

流星の逆流れ、深い闇に真っ直ぐに吸い込まれる意識が世界から離されていく。

痛みはもうなく、血も見えない。

抑えた胸の手を呆然と見つめたまま敦子は呟いていた。

「こんな事になるなら……会いに行けばよかった。貴方に会って、本当の気持ちを聞けば良かった……」

一瞬よぎった素直な自分。

だけど、それで物事がすっきり解決したのかという疑問は泡のように頭から溢れ出ていた。

死に行く途中だというのに、未練に辛みが次々に頭に浮かぶ、情念の走馬燈に苦しみ以外の苦みで顔が歪む。

「いやよおおお!!」 なんで私ばかり反省して、謝って、繰り返して、尽くして!! こん

なままで死にたくない!!! 絶対に嫌!!!」

遠ざかった星の尾に手を伸ばして叫んだ。

「嫌!!! 生きたいの!! 逝きたくないの!! 愛されないまま死ねないの!!」

大音響の悔恨に戦いたのか暗闇は霧を払うように消えると、真つ青な空間に敦子はいた。

ただ感覚的に体は引き続き落ちている事だけが解る場所に。

「天国逝きに変更? どっちも嫌……死にたくないのよ……」

そこで意識は軽く、モールス信号のように途切れ始めた。

コマ送りの人生……もう戻れない現世を遙か彼方に、涙の目で落下していく。

「私が魔法少女だったら……空も飛べたのに……」

閉じた目の落下する敦子。

背中の側が暖かく輝き、大きな円陣を描いていたことなど気が付く事もなかった。

それは青空の下に広がる海に、石礫のように落ちていく敦子を守る大きな魔方陣となつて広がっていた。

光のライン、回転する大きな輪は、蒼天の海を走る小さな船にも良く見えていた。

「はいは……どいば……」

思わずポロリとでた訛り、湿った自分の体、落ちた体温で骨まで冷えた感覚。痺れる手とぶれる唇、かみ合わない程に踊った歯で敦子は薄く目を開いた。

「気が付いたか、よかった」

「……誰、天使なの？」

霞みのかかった視界、少しずつ明るさに慣れる目を何とか瞬きする。

声をかけてくれた人を見た顔が、少しこわばる。

相手が天使で無い事はすぐにわかった。普通の人間で濃紺スクール水着を着用している人で……何故か白地に青ラインの眼帯。

「あの……」

「いい、そのままにして。怪我はないようだが溺れていたんだ、疲れが出ているのだから」

落ち着いた物腰の語り、声は若く、絞まった顔付きに引つ詰めた長い黒髪。

前髪を切りそろえた下の顔は、本当に澄ました美しい作りなのだが……片目にかかる眼帯の有りようが不可思議で首を傾げる。

人がいるという事はあの、狂気のオヤジが振りかざした魔の手から逃れられたという事なのだが……何故に露天の空の下にいるのかは以前と謎。



「あの、ここどこの病院ですか？ 後、今何時ですか？」

「ここは病院じゃない、だが気を大きく保っていてくれ。時間は1408（ひとよんまるはち）、昼を少し回った所だ。夕方までには基地に着く。または迎えが来るさ」

軽く颯爽とした物言い。

片目の笑みは敦子の顔を見つめると大きく口を開いて笑つうと、握手の手を伸ばしていた。

「はっはっはっ、しかしすごいものを見せてもらった。あんな大きな魔方陣は宮藤以来のものだった。どんな修行を積んだら……ああ、自己紹介がまだだったな、私は扶桑皇国海軍坂本美緒少佐だ。坂本とでも呼んで貰えばいいが……貴殿はこの部隊のウィッチかな？」

「ウィッチ？ 私は東京都杉並区の……えーと会社勤めのOLで、魔女とかじゃないから失礼な事言わないでください。意識はしっかりしてますから」

「東京、帝都来たのか。じゃあ貴殿も扶桑の軍人なのか」

「軍人じゃないから……なんで軍人に見えるのよ。ただのか弱い女です。貴女……」

どう見ても年下の少女にすぎずけと言われるのは腹が立つ。

それが理由の分かる物ならばまだしも、全然身に覚えのない用語を並べた話しをされればなおさらに気が立つというもの。

敦子はこの坂本少佐と名乗る少女が不思議な物体にしか見えなかった。だから彼女の周りにあるものから現状を少しでも把握しようと考えた。

自分にかぶせられていた白色の制服、彼女の側にある……日本刀？ さらに横にある大きな鉄砲？

その横に並ぶ大きな筒二つ。白地に半分緑、裱の部分に日の丸のデザインを付けた筒？

全体を見た感想としては、嘘くさいコスプレではなく現実っぽいけど、どこか違う。現代日本人だろうに軍人なんて軽く口にするのもおかしい。

自衛隊の人にしても若い……考えながら出された手を握ると坂本に尋ねる。

「私は小林敦子。えーっと扶桑って……三菱関係の人なの？ 貴女？」

「あつはつはつ、九六式は昔使っていたが、三菱の人間ではない。扶桑軍人だ。君も帝都からきたというのなら扶桑の者という事だろう」

「扶桑って……日本のどこの事ですか？」

「扶桑は扶桑だ」

重ねて返される扶桑という国？ 地域名？ 苛立ちは力にもなる、小舟の中でゆられながら寝そべっていた体を起こす。

敦子の質問に、目を丸くしている坂本の顔が写り、その後は周りの景色を目が写す。

小さな安息地の周りを見回して大きなため息が落ちる。

寝ていた所が小さな船の上と知って、広すぎて果てのない青い海に心が折れそうになりながら。

「ねえじゃあ、どこどこなの？ 私は早くうちに帰りたいのだけど」

「ここは地中海、もう少しいくとロマーニャが見える。はっはっはっ、ここから扶桑に帰るのは不可能だぞ、小林はひよつとして脱走してきたのか？」

「ち……地中海？　なんで、私東京にいたのに……天国って別名地中海だったの？　て

いうか、脱走じゃなくて脱出してきたの、危ないオヤジに殺されそうになって……」

「殺されそうに……そうか、だから貴殿は魔方陣を使って自分を護り海に落ちたという事か」

混線？　脱線？

自分の言い分が上手く伝わっていない事に眉をしかめるが、次ぎに口を塞いで俯いた。

敦子は自分が氣を失っている時に、魔法少女妄想を寝言で口走ったのではと勘ぐった。

だからこの坂本という女の子が、自分を魔女だの、その手の魔方陣を使っただのと言いかがつているのだと思った。

遊ぶ目と赤くなった耳のまま、背けた顔で小さく聞く。

「あの……私、寝てる時に何か言ったかしら?」

「うん? 何も。ああ歯軋りはしていた」

絶句する……というかむせる。

恥ずかしいと更に顔赤くして、この年下の小娘に大人をからかうのはいい加減にしろと声を挙げようとしたその時、坂本は立ち上がっていた。

「いかん、小型のタイプが残っていたのか」

立ち上がるうとしていた敦子の黒髪を抑えた手で振り返った坂本は尖った目で言った。

「ネウロイが残っていた。小林も追われたものだろう。……しかしながら現状魔法力を使いきってしまった私は、すぐには飛べない……どうやり過ぎすか」

「あの、何言ってるのかわからないんだけど。何が来るの、またオヤジが来る……」

頭を抑える坂本の手を払って、彼女がきつく尖らせた目を向ける空を見た敦子は目が大きく開いたまま言葉を失っていた。

空に浮く黒い昆虫、ダンゴムシが所々を赤色に発色させた歪なる姿に。

「息を潜めて……ここを過ぎてくれるのを待つしかない。小林もストライクユニットを失っている今の状態では戦えないだろう」

惚けてしまった敦子を小舟の床に擦りつけるように抑える手。

されるがまま、目だけが空に浮かぶ塊を見続けて聞いた。

「ねえ、あの虫は何？」

「貴殿……記憶に障害か？」

きつく口を絞め、悠々と空を行くネウロイを目で追いながら坂本美緒はかみ合わない会話の謎を自分なりに解析していた。

扶桑の人間と思われる彼女が、扶桑がどこかわからない、だが帝都出身という自称はしている。

地中海は知っているが、そこに数多現れるネウロイを知らない。

おそらく戦闘中の記憶障害を残しているのではという結論に、敦子の口を押さえる  
と、必要な事だけを教えた。

「いつものネウロイだ。我々の敵である。だが今は戦う手立てがない、静かに過ぎるのを待とう。やっとわかったよ小林は先ほどの戦闘で記憶が混濁しているのだろう、だが安心してくれ、今は静かに事が収まるまでを待つてく……」

「いい加減にしてよ!!! 私はず常なの!!! なんなのよ、さつきから私の事田舎者の勉強出来ない子ちゃんみたいに言つて!! あんた失礼でしょ!!!」

敦子、怒りの仁王立ち。

坂本美緒にして時は止まっていた。

この非常事態に、声を荒げ自分を怒鳴る者がこの世にまだいたという事に対する仄かな悦と、その後ろウィッチの気配に気が付いて赤い発光部分に光源を集中させ始めたネウロイの姿に。

「はっはっはっ、勢いは買うが後ろのをどうするか考えていたのか？」

「笑ってるんじゃないわよ!! 大人をバカにして!! 後ろがなんだっていうのよ!!」

そしてクルリとターン。

先ほどより距離を詰め、禍々しく赤色のパネルを輝かせるフライングダンゴムシと目が合う。

首をならすように左右に、気怠く傾げた顔は驚いてはいなかった。

むしろウンウンと頷き、ここが現実と違うのならばとことん遊んでも良いだろうと珍妙な覚悟を決めていた。

「はーあ、わかっているわよ、こんなの夢よ。だって私は今大学病院の集中治療室にいるのよ。息も絶え絶えで夢と現の間をフラフラしていて、オペ室の隣では両親が泣いているのよ!! この迫ってくる黒いのは私に刃物を刺したオヤジを抽象化したものでしょ。もう頭に来たわ、許し難いわ、かかってきなさいよ!! 引っぱたいやるわ!!」

笑う坂本の顔に、敦子の癩のピークは峠を越してダッシュしていた。

立ち上がり両手を腰にしていた敦子は、空から覆い被さらんとするダンゴムシに手を向けると。

「さあ、この夢の中で魔法爆発よ!! 美と愛の女神の力を借りてただいま参上魔法少女アイリーンの前に跪きなさい!!」

向けた掌から大きく広がる真円の魔方阵。

同じく水面に広がる魔方阵。

巨大観覧車が突然海に生えたような大きさに、坂本は片目を大きく広げて感嘆の声を挙げていた。

「すごい、この大きさ……この強さ……」

「あんたより大人の魔法少女に敬意を払いなさい!! 小娘!!」

トンチンカンな説教を飛ばしながらも、敦子は昔憧れだった魔法少女の名前とともに絶好調の気分に乗っていた。

自分の言葉で発現した光の円陣。

クルクルと忙しく回るそれ、魔術陣の構成交換、ならびに属性のエレメントを循環させる図は子供の頃テレビで見た力そのものだった。

「あははははははは、楽しい!!! 魔法少女最高!!!」

もう後ろに坂本がいる事なんてどうだって良くなっていた。

敦子にとって此は夢でしかないのだから、何を叫んでも何を行っても恥ずかしいなんて事はなくなっていた。

同じぐらい自分の頭に生えたハムスターの耳と、臀部違和感である尻尾にも気が付かなかった。

広げられた円陣に、ダンゴムシ型のネウロイからの光線が飛ばされるが、ラインをへし折り、鏡返しのように次々と弾いていく。

「あーもー、衣装も替わってよねー、盛り上がりがないじゃない!! ピンクのフリフリとか、黒のレースとか!!」

OLルックのまま、踵のへたったパンプスで魔法少女なんてと愚痴る敦子の後ろ、坂本は目を輝かせて攻防を見ていた。

そしてこのまま大声で笑ってしまいたいという感情を堪えつつ、展開された巨大な魔方阵の後ろで攻撃のための機銃を構えた。

「すごいぞ!! 小林。これなら私も迎え撃てる!!」

号砲の反撃、魔方阵に守られた坂本美緒の激射に迫るも攻撃するも弾かれ続けて足をすくめていたネウロイは、黒い殻がガラス窓のように割れていく。

外殻を打ち壊し、白い破片を飛ばし、ついには中身の宝石である真紅のコアを露出させる程にダンゴムシの山は切り崩されていた。



「ちよつとちよつと!! 銃器使うなんてどつかの契約済み片思い魔法少女みたいな事しないですよ!! 品がない……」

自分の後ろで懸命に機銃の振動を抑え撃ち続けていた坂本に注意の声をかけたとき。目の前にいたフライングダンゴムシは塩の柱のように真っ白に変わっていた。

耳の中で鐘を突かれる号砲の後で。

粉々に砕け海に落ちていく氷みたいに、一瞬綺麗に咲いて雪の結晶のように姿をクリアにしたネウロイはあつという間に崩れ消えていった。

「間に合ったか……助かった、リーネ」

方向一直線の遠距離射撃は僅かに輝いた赤石を見事に粉碎し、坂本達を守っていた。た。

雲に白い軌跡を引いて、ストライカーユニットを穿く魔女達。

インカムに届く仲間達の声に、無事を知らせる坂本の前で敦子は虚脱していた。

見失った悪者の姿、奮い立っていた気が抜けた瞬間に肩にかかったウエイトはドラム缶を担がされるイメージ、重度の疲労だった。

甲子園のマウンドに敗北の膝を着く投手のように、ガクンと体が折れる。

「あーああああ? 何、もう……なんか……落ちそう……」

「魔法力を消耗していたところでのもう一働きだったからな、休んでくれ小林、よくやつ

てくれた」

「あんたね……年上を呼び捨てにするもんじゃあないですよ……礼儀つてものがないの……まあいいわ、毎月保険料8840円×2払ってるんだから……ベッドはふかふかの一等室で個人部屋の病室に……してちょうだい……」

混濁し、重く瞼を下げて目を閉じた顔でそれだけ言うと言と敦子は気を失った。坂本に支えられ、その膝に頭を押しつけるように前のめりに倒れて。

「美緒？ 今の魔方陣は何？」

敦子を支え、上空を飛ぶ仲間にも手を振った坂本美緒は、ミーナ隊長の驚く声に声高く笑って見せた。

「はっはっはっはっはっ、凄いウィッチがいたものだ。世界は広いな、ミーナ」

「ええ？ 何が？ 怪我はないの、無事なの」

「ああ、無事だ。心までウキウキする程に無事だよ」

その声には希望があった。

歳を取ることで失うハズの魔法力、それを自分より年上にして遙かに持ち合わせている存在と出会う奇蹟に。

儂い花が、根を張る大樹に変われるきっかけがあるかもしれない。

自分の手を開き、強く閉じた坂本美緒は疲労困憊に倒れた敦子の背中に言った。

「色々と教えて貰うぞ、小林。とりあえず注文どおり寝心地のいいベッドの仕度は任せ  
ておけ」

そして敦子がこの世界を現実と認識してパニックを起こし、さらにウィッチとして活  
動を期待される事で、思わぬ屈辱を味わう事になるはこの三日後、目を覚ましてしまっ  
た時に始まるのであった。

## 飛びたい乙女……現実の錘

「トンネルを越えたら……そこは、地中海という天国でした」

白い日差しに潮香り。見渡す海の青さは日本ではお目にかかることが少なくなつたエメラルド。

砂浜に近づくと程透明になり、沖に向かうほどに淡い碧色をつけた紺を見せる。

色分けされてもそこに住む魚の影の流れが見えるほど透明な海、空の青さから恵みの尾を得たように広がるパノラマを前に敦子は眩しい太陽に目を細めていた。

石造りの窓際、重ね合わせのうえに窓枠が付けられ味わい深い茶色のすすけた端に両手を組んだまま体ごと傾けて外を見ていた。

大きく間取られた石畳の部屋。

真ん中に置かれたベッドはクイーンサイズ。

素っ気ないつくりではあるが、風光明媚である窓から向こうの世界をみれば十分過ぎる休息の間。

不思議な場所。

海側、自分のいる場所より遠くには砂浜があるのだが、真下にあるのは壊れた遺蹟ば

かり丸くこの島を囲むように白亜の石を海に浸した遺蹟は、円形に繋がっているようにも見える。

廃墟というには美しすぎる、波の音も緩やかで優しく、日差しも曇りのないもの。

新婚旅行に来るならば、これ程理想の場所も無いだろうと窓に寄り添って頭を転がした。額に張る怒りの亀裂をほぐすために。

つい先ほど、晴天の空に飛び立ちそうだった羽根付きの妄想心に、現実という五寸釘を打ち込む質問を受けたばかりだった。

「小林、率直に聞こうお前今何歳だ？ 見た感じからすると二十歳はとつくに過ぎてるよな？」

目覚めの開口一番の声に、顎から下、歯に踏ん張りが瞬時に入る。

倒れて運ばれた病院で最初にされるにふさわしくない質問……この病院は患者にストレスをもれなくプレゼントする事に命を懸けてるのか？ 首を右に傾げて睨んだ。

病室をノックと同じドアを開けて訪れた人物。

坂本美緒という、白色に金ボタン仕立ての良い制服なのに、下は水着という怪異な出で立ちの少女は怪異の延長である眼帯で隠した目とは逆の目と、口元に溢れんばかりのうれしさを見せて答えを待っていた。

当然喜ばしくない質問に敦子の首は、黒髪で怒りの視線を隠すほど大きく傾いでい

た。

真つ赤に意識を塗り替えて怒鳴りそうになる程に、しかし大人として突然激怒は見苦しいと堪えていた。

いきなり患者の歳が聞きたいなんて……

烈火になった意識を大人のリミッターが働き平静にシフトする。

ここは病院であると。病院だからこそ、これからの入院生活に必要な質問なのだろう？ 年齢確認も大切だろうと懸命に胸を押さえ熱くなった息を飲み込んだ。

「……今年三十一……あー、来月で三十三になるわ」

「三十三だと!!!」

穏やかな波の音に、反逆する敦子の血管。

驚くにしてもそんな大声で……

額を脈打つ衝動は、オウム返しの年齢豪語に対して小刻みに震えていた。

「……三十三だとなんなのよ……更年期障害とかまだでてないわよ」

「いやいや驚いた。とつくに枯れていていい歳なのに……」

「枯れてないわよ!!!」

「本当だ、まったくだ、枯れてない。すばらしいぞ」

悪びれない顔、前髪を綺麗似整えた美麗な眉は嬉しそうに弓成る。

相手のそういう顔が、心により一層の錘を置いていく。

喉に怒りを詰め込んだ敦子は黙ってドアの方を指差した。

「……ねえ、出てつてくれない……せつかくの療養なのよ。あんたが私を怒らせたいの  
は良くわかったけど、付き合う気はないの……先生呼んでよ」

「うん？」 怒らせる気などないぞ。それに体の方はもう大丈夫だ、怪我もしていない。  
実にすばらしい、良く鍛えている」

「いいから出て行ってよ!!!」

歳だの枯れるだの……熟年乙女の心に石礫を打つような、言つてはならない禁句を並  
べ立てて、嬉しそうな顔を見せていた坂本という少女を追いだしていた。

敦子は潮風に揺られた体を抱いて愚痴っていた。

「そりゃあんたみたいに……若くないわよ……」

リゾート地だからか、制服の下に生足を惜しげもなく晒していた坂本を思い出して時  
には真実を認め、いきり立った自分を諫めるように言葉に出して見るものの、否と顎に  
力が入る。

「ダメよ、そんな事を言われて黙っているなんてあり得ないわ。言い出したらきりがな  
いのが若さつてヤツよ……言い返しておかないと調子に乗って際限なく言われるわ」

敦子はこの不可思議な状況をまだ半分も飲み込めていないのに、神経質に自分の事だ

けには目を尖らせ、腹の虫も同じぐらいに現実的に鳴いていた。

「……怒ると、お腹減るのねえ……ご飯はでないのかしら、保険にそういう項目はあったけ？ けちらずスーパードワイド保険にしておけばよかったわー」

柔らかな日差しの下、部屋のベッドに敦子はダイブした。

ご飯を頂くには追加料金がいるのか？ それとも保険で賄われるのかと現実的な空腹に腹を鳴らせながらも、夢心地の空間に寝転んだ。

「ええ、後のことはこちらの方で、手間をかけます」

デスクに備え付けられている黒板消しのように大型の受話器を下ろした赤髪の中佐ミーナは、壁越しのイスに座った坂本美緒に了解を取り付けた事を目で教えた。

「すまない、ミーナ。助かる」

「それはいいけれど、あの中年女性が魔女なのは解るとして……例の大きな魔方陣を発生させたとは信じられないわ」

小林敦子という中年女を、漂流していた坂本美緒共々保護した時に見た魔方陣。

大きさもさる事ながら、空から客観的に見たそれは扶桑の文字だけではなく複数の言語が込められた初めて見る形のものだった。



それを確認したが故に、ミーナ中佐は魔方陣の存在が蜃気楼的なイリュージョンで、本物ではないのではという疑問をもっていた。

「いや、目の前で私が見たんだ。間違いない」

「美緒が見たという事を否定はしないけど、力をもった魔方陣だったとは……」

「もっていた、凄い力だった。だが信じがたいという気持ちもわかる……だからこうしてここにおいてもらう事にしたわけだし」

「そうね、時間も必要かもね……それにしても年齢がね……」

敦子をここに連れてきた以来三日間、眠り続けた相手の様子を朝一番で見に行っていた坂本。

今日は目を覚ました敦子に最初の質問をして帰ってきていた。

「そうだ歳、まったくおどろかさされた。本人に聞いたのだが年齢は三十二歳。魔法力の減退には諸説有るが、一生持ち続けたとしてもあれほどの魔方陣を維持できる者は見たことがない。枯れる歳をとくに上回っているのに、これには絶対に何んらかの秘訣があるに違いない」

理路整然とした物言いの坂本だが、ミーナの顔は険しかった。

前の大一番、ガリア解放に戦った終盤に坂本が魔法シールドを失い、命を落としてそうになった事を憶えていた。

今回ロマーニヤの危機に再び集まり501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズに参加してくれているが、坂本は自分の生ききる道はそこにしかないと言わんばかりの参戦であり、それを思う程に心配がぬぐえない。

心強い、そう思うと同じに失いたくはない大切な友は、懸命に自分がウィッチとして弱き者達の前に立つことを願いつづけている。

ミーナは小林の存在に目を輝かせる坂本に小さなため息を見せた。

むろん相手に自分の心痛を伝えるために、解る形で。

「美緒、小林さん？ そのウィッチから魔法力の延命を学びたいという気持ちはわかるけど……」

「おいおい、そんな矮小な言い方をしないでくれ。自分を鍛える新しいチャンスに恵まれたと思っている。私が規範となってその技を会得する。悪く無いだろう」

左手側に置かれた扶桑の刀「烈風丸」

赤東威のそれには香るほどの魔力の集積が行われている。

坂本が自らの魔法力を注ぎ込み作った魂の一品。そうまでしても空に馳せる思いを命令という形で踏みにじりたくない。

ミーナは諦めたようにイスに座ると、手元に用意してあったティーを勧めた。

「良い結果が得られるといいわね、私にもその日は来るのだから」

「まだまだだ、ひよこばかりを空にはやれない。簡単には引退できないぞ」

「引退したくないのは貴女でしょ……もちろん私も全てが終わるまで、そのつもりはな  
いけれど」

「ああそういう気持ちが大それた」

顔を合わせた目で笑い合う。

二人共年齢的には戦闘航空団に付くウィッチとしては微妙な歳になっている。

ウィッチの魔法力に頼る羽根は、ゆつくりと確実に魔法力を吸い上げ戦いの空に散ら  
していく。

与えられた力、ギフトである魔力を……

それでも花の十代、同年代の少女達が送る色恋につぐ不偏の青春を投げ捨ててこの戦  
いに身を投じる意味は。

同じ思いをするウィッチが、この先も産まれてくるのは嫌だということ。

自分達の代で、不確定で不気味な敵であるネウロイを倒したいの一言に尽きた。

だからこそ誰よりも長く空を飛び続けたい。

その思いを二人共が抱え、その気持ちを友に戦うウィッチ達が持っている。

言わなくてもわかる笑みの裏を確認した二人は目に走った力みを抜き、イスに深く  
座った。

「ところで最近のネウロイの傾向なんだけれど……以前も人の擬態をするという形が見られたでしょう」

「今度の流行りは違うみたいだな」

一息ついた所でミーナは写真が添付された資料を差し出した。

各隊が対峙したネウロイ達の写真。

異形の敵である彼らの千差万別の姿を持っているが、共通している部分はヘキサグラムの外殻集合体である事。

「流行り……そういう見方もあるかもしれないけど、ネウロイが私達の側の兵器を真似するというのは前からあった事だし、今でもそれが主流なんだけど、特に最近は……」  
「昆虫を混ぜたような形が見受けられるな」

異形の敵であるネウロイ。

最初のティーを飲み干した坂本は眼帯をしている目の側、こめかみの部分に指を二本突いて。

「コピーしていく意味を、またはコピーする事の利点を知りたいって事かな？」

戦場に置いては目の前の敵を討つことだけを真つ直ぐ考える兵士ではあるが、冷静に敵の分析をするのは指揮をとる坂本やミーナ中佐の仕事でもある。

「それを言い出したら今までだって色々な擬態をしているわけだから、本当にきりが

ないけど……」

「ないけど？」

「ネウロイの擬態は何かを探して、それに合わせて形を作っている、そんな気がするの」  
抽象的に飛び問答。

本来ならばこういう会話は軍隊的ではないものだ。

イエス、ノー、と具体的な話しをする事で対策を奉ずるのが正しい方法なのだが、  
ウィッチ同士として話すのにそこまで堅苦しくなる必要はない。

むしろ軟化した会話の中から答えを出す対話を必要としていた。

抽象の夢さえも能力の一端である者達の会話は、形が整った硬質なものよりも有用な  
時も多い。

「ミーナの直感がそう感じ取っているのならば、奴らの形状にも注意を働かせ見落とし  
のないように戦う事も必要となってくるな」

「ええ私も各隊の目撃情報などから、それが何かに迫ってみようと思うわ」  
魔女の直感。

特にこの能力に優れているミーナが持つ疑問を捨ててはおけない。

坂本は自分の目が持つ能力で、それら疑念に対応をする事を約束すると、付いていた  
指で眼帯を軽くさすって立ち上がった。

「よし、話しは終わりだ、訓練に出る」

「待って美緒、その小林さん目を覚ましたのでしょ」

「ああ目を覚ましたから歳を聞いた。そしたら凄く怒ってな……うん、何がいけなかったのかわからないが、記憶が混乱している時にあれこれ催促すのもあれだし、食べたかっただろうから飯の仕度をさせて宮藤とリーネに行ってもらおう事にしたよ」

「危なくないの？」

「そんな気は感じなかった。大丈夫さ」

さらりと言いつ切る。

男顔負けの潔さで悪戯な目は笑って見せた。

基地司令として重荷を背負っているミーナに世話をかけるといふ気持ちも、前向きに頼むと背中と言う。

「別に重荷じゃないわ、扶桑の魔女が問題を持ち込むのには慣れたから」

互いを良く知り合った顔は、見つめ合わなくても心を知っていた。

「天国にはハレンチ学園がある……」

ベッド越しに見える給仕の姿に、敦子は少しの混乱を起こしていた。

「というか、この病院が実は精神科系の病院だったのではと、心を泡立てていた。」「お口に合うと良いのですが」

羽布団の中で体操座りしている敦子、小山のようにポツンとベッドに座る姿は、布団の中から目だけで給仕姿の白エプロンを着けた宮藤芳佳を見ていた。

セーラーには水着……それは先に来た坂本という少女にも似た姿で……漠然と、いや無理矢理ここはリゾート地と心に判子を押し続けていたが、隣の少女の姿にその思いは打ち砕かれていた。

明らかにスカートを穿いていない姿、上等なブリテイッシュジャケットにVネックのセーター……なのに、上着のカッターシャツはタックインしていない状態その下にハッキリと見えるローレグの……白いブーメランと小さなリボン。

「あの一、食欲無いんですか?」

凝視する目の前を、ドングリ眼が近づいていた。

潮焼けなのか黒髪をオレンジに焦がした幼顔の少女は敦子の血走った目を見て、心配げに眉を下げている。

「いえ、そういうわけでは……むしろ凄くお腹減ってます」

年下の少女に奇妙な敬語。

どう辺り触って良いのか困る状況の中で敦子は懸命に考えていた。

ここが夢と現実の狭間で、自分が半ハゲオヤジに刺されて重篤のまま集中治療室のベッドで夢を見ているのではという事までを範囲に入れて、もう一度配膳をしてくれる二人を見た。

「ここは天国、地中海という天国で、和風のご飯が出るというのも……レアな体験だけだ」

もう一度、パンツ丸出しの少女を見る。

「ここは天国……そう天国には天使がいるもんね……そうだよ、だからだよね天使ってフルチンだし、でも女の子の天使がいきなりフルモンティーってわけにいかないから……だからってなんで下半身だけ丸出しなのよ……」

懸命に状況を自分に理解させようとして涙目になる。

だったら上も脱いでろよというセルフ突っ込みで目眩がする。

こんな露出が日本国で許されていたのかという現実的な疑問を、懸命に夢のオブラートに包もうとするが、これが夢であったとするのなら……自分の満たされていない欲求ってなんなのという自己嫌悪で頭をシンクする。

「まだ具合悪い所があるんですね」

「色々具合が悪いわ……ねえ聞いて良い？」

もうここまできたにら聞いた方が早い、何故ここに詰める少女達は下を穿いていない



のか、最初にあつた坂本という少女も下は水着だけというおかしなかつこうだったが、この白人らしい少女の姿にはカオスを感じていた。

こんな白昼堂々と白のショーツを晒して病院の中を闊歩している者などまともな人間である訳がない、リゾート地にあるステキな病院は、社会の窓を開放しすぎて、女までオープンになり過ぎてしていると良心的な考えをうかべながらも……露出狂が集うアイランドに隔離されてしまったのかという心配で胃が痛い。

敦子は自分の胸を押さえ深呼吸をすると、こわばった顔をあげて薄く開いた目で念を押した。

「ずばり聞くけどいいわよね？」

「はい、なんでもどうぞ。とりあえず自己紹介をします。私は宮藤芳佳と言います。こちらはリーネちゃんです」

「リーネちゃん……そうリーネちゃんは、なんで下着姿なの？ おつちよこちよいで穿き忘れたつていうならば……それはそれでいいけど、スカートは穿いた方がいいのよ、きつと……」

うわずる声、リーネと紹介された栗色髪の落ち着いた顔立ちの少女を、見てはいけなのでは感じてしまう羞恥の空間。

布団の中で重く踊るバスドラの心音で、こんなに堂々と見せられれば女同士でもこつ

ちが恥ずかしいという態度を目と手で指差して聞いた。

「はい？ 穿いてますよズボン」

愛らしく気の弱そうな青い瞳が不思議そうに首を傾げる。

同じように宮藤が、敦子の視線を追ってリーネを見る、そして戻って敦子を見た顔は不可思議を乗せたまま首を傾げると。

「穿いてますよ。やだなー、びつくりしたー、いくらリーネちゃんでもズボン穿かずに歩いたりしませんよ」

「ひどいよ、芳佳ちゃん!! 私、ズボンを穿き忘れた事なんて一度もないよ!!」  
ズボン？

自分の質問を前にはしゃぐ少女達。何か自分が間違った事を聞いてしまったのかという不安は敦子の頭の中を、悪い方向にキリキリ回転を上げていた。

裸の王様のな……花よ蝶よ、たのしげな笑みを見せる二人の中で敦子の暗雲は積乱雲のごとく大きく猛っていた。

「ズボンってそのショーツの事？」

「ショーツ？ これはズボンですよ」

「えっ……それパンティーじゃないの？ 下着よねそれ？」

「はい、ズボンですよこれ、下に着てるから下着？」

可愛く小首を傾げている笑い目が、敦子の焦燥に塩を撒いているように感じる。

と同時に、ここは開かれすぎた妖しいリゾート地で、日本人で三十を超して女である自分にはとても生きていけない土地だと理解した。

被っていた布団をはね除けると、目眩に震える体で起き上がった。

「……保険屋さんに電話しなきゃ、なんで？ どうしてこんなおかしな病院にいれられちゃったのよ……私が何したつて言うのよ。月掛け二倍の安心サポートプラン電話一本で何でもご相談の親切設定は、男向きに親切つて事だったのね……冗談じゃないわ、ちよつと電話させてくれない？」

「はい、電話ですか……電話は司令部の方にいかないのかな？」

「ミーナ中佐の部屋にはありますよ」

立ち上がった敦子は、意味不明な事を話す二人の前を幽霊のようにスラリと通り越していた。

この子達と話しをしても埒があかない。この子達は、このいかれた病院で性的虐待を受けている。

だから下を丸出しで歩いている。

陽気のいい場所のせいでごまかされているが、ここは精神科の病院でももつとも悪辣な所だと勝手に思い込んで部屋から飛び出した。

「にげなきや!!! こんな所にどうして私いるのよおお……」

「待って下さい!! 案内しますよ!!」

「いやああああ、追ってこないで!!!」

OLルックが全力疾走。

もう待ってなど居られない、ここに隔離されたら自分のいずれ下半身丸出しの服を着せられるかも知れないという、心の底からの羞恥心という恐怖に、敦子はパンプスの足でダツシユを決めていた。

その後ろ目を丸くした二人が追ってくる。

「いやよ!! 絶対に嫌!!」

普段使わない筋肉をフル活用して走って行く。

そんな純粹そうな目で声をかけられても、普通じゃない事を容認は出来ない。

走りながら敦子は保険屋に怒鳴り込もうと硬く決意の拳を振り上げていた。

「こんなところに居られないわよー!!」

絶響と共に勢い走りきったそこは……真正面に海が広がる大突堤だった。

真つ直ぐに伸びる大栈橋にもたた道、振り返った後ろにそびえるニケ象にもたた巨大な彫像、それを支える大きな建物に、息を上げていた敦子の呼吸が一瞬止まっていた。

青い海の中に立つ、白亜の病院は、その中身とは違って美しくて荘厳過ぎた。

汗に濡れた顔に張り付く髪を手で払う。

熱量を考えれば、これが現実である事を信じざる得ないという脱力が体を襲い、力を無くした口元は愚痴を滑らせる。

「なんで……こんなステキな場所なのに……ていうか……本当に……こここのよ？」

「うん？　小林どうした？」

一難を逃げた敦子に声をかけたのはけたたましい音に乗った坂本だった。

そしてその姿に敦子はペタンと座り込んでいた。

顔はあの眼帯を付けたまま、背負いに日本刀を持つ珍妙さにも慣れていたが、その足下には驚きと夢の始まりが見えていた。

両足についた筒、その先に光の輪が見える。

鼠花火のように、忙しく回る光のラインが風を切る音を繰り返している。

太ももまでを覆う筒で足首は見えず、それだけならずいぶんと尖った靴だと眉をしかめただろうが、驚きで座り込んだ最大の理由はまったく別の事だった。

自分の目に写る、地上から離れ浮いている坂本の姿に震えを感じていた。

「……なんで浮いてるの？」

「うん？　ストライカーユニットを知らないのか？　それとも思い出せないのか？」

「知らないわよ、そんなの……」

ただ呆然だった、坂本は足を揃え自分の前にいる。

生足をつつ込んだ筒は地上から綺麗に切り離され浮いている、座り込んだままの敦子は本当にこれが浮いているのか？ という疑問を子供のように確認していた、浮いた下に手を通して。

何にも振られない空間に手を游がせて。

「本当に浮いてる……なんなのこれ……」

唇を震わせる敦子の、ストライカーユニットを知らないという答えに坂本は顎に手を当て一思案をして大口で笑った。

着装しているストライカーを両手で叩いて見せると、目の前でクルリと一回転してみせた。

浮いた足で氷上を滑るように綺麗な一回転、どこにも自分をひっかけるものがない空のリンクを遊ぶ姿に敦子の低いドラムロールのような気鬱な鼓動が、羽布団のように一瞬にして弾けていた。

嫌気で聳めていた目が、少女のように輝きの星を取り戻す顔に、坂本は陽気に煽った。

「飛んでみるか？ これを穿けば飛べるぞ」

「飛べる？ 空を？」

「ああ空を飛ぶんだ」

手を挙げて澄んだ晴天を指差す。

百聞は一見にしかず、憶えていなくてもストライカーを穿いて空を飛べば思い出すかも、実に坂本らしい実践型のショック療法だったが、敦子の目は驚きに開いたまま答えを出せずにいた。

「ねえ、これは夢なの？」

見えない自分の世界観、現実的な夢の前で小さく首を振った敦子に坂本は続けて笑って見せた。

「夢なのかもしれないな、だったら飛んでみてもいいだろう」

夢かも……夢なら……。

腰砕けになっていた体は自然と起き上がっていた。

夢なら飛んでもいい、空を飛べるなら夢でもいい。

「飛びたいわ」

そう言った敦子に、坂本は後ろを指差した。

高くそびえる赤煉瓦の城壁、その下に口を開けるガレージの中、坂本が穿いてるのと同じ筒がボックス型のランチに架けられて綺麗に並んでいる。

魔法のほうきや、白い羽根とは違うけど、穿けば空に舞い上がれるブーツに敦子はゆっくりと近づき、滑らかな曲線を手で触れていた。

「さあ、飛ぼう」

「飛ぶわ……」

魔法少女になるのが夢だった。

空を飛んで、貴方の所に一つ飛び。

夢の中にいる自分が、夢を叶える魔法のブーツを目の前にしている。

もうそれだけで、それだけを信じて敦子はブーツに足を差し入れた。

「……食欲ないんですか？」

宮藤芳佳は、目の前食堂のテーブル端に座ったまま頬を膨らませている敦子に上目遣いで聞いた。

「……あつたけど……食べたくないわ」

小林敦子は空腹の腹を抱えて涙していた。

夢を叶える魔法のブーツ、空を軽く飛ぶ坂本の姿に、自分も飛べるはずと意気込んだ熟年乙女の花は……。

己の足の太さであえなく撃沈されていた。

どうやっても入らない足……現実の錘が、夢の魔法少女への道にガツチリ蓋をしてい



た。

「私が月下美人（ハニイ）より太つてるとでもいうのおおおお」

唇を噛み月に吠える。

小太りOLのハニイよりマシなんて思っていた自分の体のゆるみに涙が千切れる。

夢の中なのに容赦のない現実。

「変身できれば……穿けるのよおおお」

丸めた背中の後ろ姿に、苦笑いの坂本美緒。

これから出会う少女達の前で、乙女心だけは健在の敦子に目標は出来ていた。

この夢の中で絶対に空を飛んでやるという、現実にはあり得ない願いを、現実の体を絞ってと。

「あんた達みたいなの針金足じゃなくて悪かったわね!! 今に見ときなさい!!! 絶対に穿いてやるんだから!!!」

夢と現実の狭間で熟年乙女敦子の試練は始まったばかりだった。

## 空に行くには?……まず服を脱ぎます

「あのう……色々考えたのですが、やっぱり親しみやすい方がいいと思うんです。小林さんと呼ぶのは他人行儀な感じがして……なので、あつちゃんって呼んでいいですか?」

「やめてよ……後47人の仲間作って歌って踊ってとかしなきゃいけなくなりそうで……怖いから」

「えっ、そんなにお友達がいるんですか?」

「あんな友達がいたら嫌だし、私の顔はセンターに寄ってない」

湿り気のない日差し、暑い汗を湧かせるほどの事はなく、むしろ心地よい昼下がりの時を小林敦子は歩くより少し早く、走っているというには遅すぎる速度で進んでいた。

病院の敷地なある古代遺跡らしい白い囲いの中で、一日でも早く魔法のブーツを履くために……いや、履けなかったという汚名を削ぐために。

あの日から三日、OLルックとパンプスという到底運動に適していない衣服で。

敦子の後ろには、宮藤芳佳という小学生のような幼顔のセーラー、下は水着姿と……

パンツまる出しのリーネが年に似合わぬ良い持ち物を揺らしながら付いてきている。

「ねえ、なんで私についてくるの……逃げないわよ、完治するまでは」

「一緒に訓練ですよ、ていうか完治？」

「ここ病院なんですよ、いいのよあんた達が口止めされてる事は、わかってるから。そうここは病院なの、それ以外の場所としては認めないわ」

「病院じゃないですよ……ここは基地で」

「だからキチの病院なんですよ」

「いいえ、基地で病院もあるというだけでえ……」

「だからキチがたくさん住んでるでしょ」

「いえ基地はここだけで……多いうてなんですか？」

運動不足は自分だけではないという勘ぐり。

着いて来る二人は、朝練上がりで更に敦子について走っているわけだから足も纏れ、口も纏れるという具合に敦子はまだまだ自分は行けると変な自信で拳を固めつつも緊張していた。

体をそらし、胸をかばうように走るリーネを見ようとしない視線は朝に起こった事件を思い出して、苦く顔を歪めていた。

「キチで病院……私は違うから、私狂ってないから、とにかくここは……病院なのよ……」

これ絶対!!」

自分について回る二人の子供に、言い返すこと許しませんという威圧の声色で敦子は告げる。

そうでなければこんな所で普通に振る舞うなど不可能と何度目かのシンクダウンを見せると、歯を食いしばってダッシュした。

その日、事件は朝やってきた。

朝といっても目覚ましもない部屋だ、外に響く時報で薄く瞼を開け極楽気分の起床をするという日課。

何事も無ければまさに天国のこの場所に、毎日のようにライブヘルはやってくる。

今日もそうだった、そしてその出来事はブラッドプール・イン・ハーツの勢いで心臓を壊しそうな程血圧を上げた。

その朝、目覚めのアンニュイ感をぶち壊した物は目の前、ベッドの上に用意されていた。

扶桑皇国海軍士官学校服という制服に顔を真っ赤にしていた。

上は仕立てのよい黒の詰め襟、ボタンを内側に隠す海軍予備少尉服というものらし

い、曰く民間人である自分がこの基地と呼ばれる病院の中に暮らす以上この手の制服の着用は避けられないものらしいのだが……問題はその横に並んだスクール水着の存在にあった。

濃紺で……明らかに旧スクール水着に見えるそれは朝日に照らされて若々しい光沢を見せていた。

「ねえ、私が何したつていうのよ……これどういうプレイなの？」

「プレイ？ まだプレイ（意識・演技演習、おもに機銃など）はしてないだろう？」

「あたり前じゃないの!! 使用済みを私に着せようと思つてたの!!」

不可思議と首を傾げる黒の長髪。

眉頭で切りそろえた前髪の下で、坂本美緒は両手を上げるとベッドを挟んだ反対側で、顎に皺を寄せ首筋に苛立ち神経を脈々とさせている敦子を見た。

「そんな失礼な事はしないさ、新品だ。少し大きめのを揃えさせた」

「……ねえ……何度も説明は聞いたけど……なんで下はこれじゃないとダメなのよ？」

「これと言われてもなあ、そういうものだし」

グツタリと萎れる表情、空を飛ぶことを目標にした敦子だったが飛ぶためには必要な服というものがあつた。

まず、現在着ているOLルックは適さないという話しから始まり、ウィッチとしてこ

ここに駐留するために必要な事でもあるがために、このいかがわしいパンツルックをしろという事らしいのだが、パンツルックってこんなものだったけ? ホットパンツよりも卑猥度高いし中年女には厳しすぎる、涙の重みで首を傾げたいのはこっちだと言いつ返していた。

「何度も言うけど私は魔女じゃないの、失礼だわ。後さあ……せめてユニタードのやつはないの……こんなの着られるわけじゃないじゃないの、私今年で三十三になるのよ」

どんな羞恥プレイ?

やはりキチの病院が要求する服はレベルが高いと動揺する顔。

それでも目の前にいる坂本には理解されない。

いかんともし難く不自然な姿への要求が、当たり前のように持ち出される世界。

現実の世界に夢のテイスト、おかしな混線をしている思考の輪を読む。

少しずつ与えられた状況の答えを探すしかめっ面。

ともすれば朝からテンションの高いプレイ要求にフル回転の罵声がなだれのように口から出そうだが、何度も怒鳴ったり怒ったりを見せる方が余計になんらかの疾患を持つているのかと勘ぐられるのも……大人の深慮は無駄に頑張っていた。

そんな事知ってか知らずか、赤かったり青ざめたり、坂本は目の前でクルクルと表情を変えなんとか気持ちを沈静化に向かわせる敦子に笑顔で言った。

「はっはっはっ、まあ、一度着てみたらいい。これを着れば空を飛ぶときにそこそこ身を守れる。飛びたいという小林の気持ちに添えると思うから」

むろんその笑いに悪意はなかったのだろう。

だが事も一線を過ぎてしまうと、笑う少女を思い出して当たり散らしたくなる。

坂本が出て行った部屋で敦子はその服を着てみた。そうスクール水着のようなものも、やらなきや良かったとマリアナ海溝より深い故に見えなかった後悔に残酷な結果を目撃していた。

「……年月って……、私は女子プロレスラーかああああ!!!」

鏡に映った水着姿の自分、見たくもないのに見てしまった立体裁断に合わない崩れた体格。

熟れすぎて型くずれしたトマトのみつともない果肉を自分で見てしまった感想はそれだった。

まだプロレスラーなら鍛えて作った四肢の張りがあるのだが、高校卒業以来運動を遙かに遠ざかった敦子の体には……張りという二文字は無く有るのは弛みという無駄な肉の洪水だった。

ウエストなどむざんなほどに消え、山も谷もあつた人生の中で体だけが緩く平凡な道を歩んでいた事を初めて知った。

「この……このへんとか……もう……死にたい、ていうか天国なのに死にたいってどう  
いう事なのよ……ここ本当は地獄なの……」

太ももと水着の間、足の間に隙間も出来ない程みっちりたるんだ肉。

Vラインなんかは、ボンレスハムの熟成に失敗した見苦しいピンクのハムに成つてい  
た。

もう自分を見ていられない。

即座に引き裂く勢いで水着を脱ぎ捨てるとベッドで涙した。

そして決心した、走ると。

「……で静養しているうちに絶対に痩せてやる!! 引き締まったナイスボディに変わっ  
てやるううう」

鼻息荒く、後ろなど見向きもせず走っていた。

まだ道も住処も正確に把握していない基地の中を。

「……うーん、記憶に障害。ではないのかもしれない」

「確かに、話し方がすっかりしてる。記憶がどうのというよりも……」

朝敦子に制服を渡した坂本美緒は、501のメンバーがミーティングに使う部屋で顎



に手を当てて首を傾げていた。

同じようにここ何日か遠目ではあるが敦子の姿を追っていたミーナも会話の端々から感じる現実的な言葉に違和感を受け取っていた。

「正直な所小林はどこも悪くないし、記憶に障害がある者特有の曖昧な口調がない。むしろきちんと知っていて、なのに現在を知らないという感じに見える」

「私もそう感じたわ。自分の事はしつかりとわかっている人……なのに周りの状況を夢と思いつつも思っているみたい。うんう、何か知らない世界にきたみたいな言い方をする」

「もう少し時間が必要だと思う。ただ本人は飛ぶ気があるようだし、飛べばもっと正確に何かを思い出してくれるかもしれない」

「そうねえ、でも……彼女の足はいらなかったのでしょ」

基地に詰める隊長職の坂本、基地を治める司令職のミーナは過日の騒動を思い出していた。

飛ぶ事に夢色の瞳を見せた謎多き中年女は、いざストライカーユニット装着の時、緻密にサイズを合わせて作られている穴に足は入らなかつた。

必死に角度を付けたら、息を止めてみたいりと装着を試みたが、憚らぬ足の太さでしな垂れた結果を見ていた。

その様は、悪いと思いつつも笑ってしまったという顔。

「はっはっはっ、はいらなかつたな。でも怪我の功名か訓練する気にもなってくれたわけだし」

「……でも彼女はウィッチなんですよ。あの大きな魔方陣を出した……」

小林敦子という得体の知れない女がここにやってきて一週間。内最初の三日は寝ていたわけだが、三日の観察をした率直な感想を二人は出し合っていた。

ハーフトレンチのグリーンの制服、下は……おそらく敦子が見たら絶叫のダークレットのズボン。

大人びた顔立ち、貴賓ある一本とおりの良い鼻筋のせいでそう見えるのかもしれないが目は愛嬌良しにして涼しさを兼ね備えた賢母な佇まい。

片手に持った書類には既に考察と観察における小林敦子の事がかき込まれており、その資料の一部を対面離れたイスに座る少女は見つめていた。

「まだ会った事もない者の事をとやかく言いたくはないが……巨大な魔法力を持つ者と推定される人物を拘束なしに基地の中に置くのはどうだろうか?」

木イスに腰掛けたのはグレーの制服に黒の蝶リボン、髪を小さく二分けにした少女だった。

可愛らしい出で立ちとは別に襟に付く徽章と、きつく尖らせた唇、冷徹さを宿らせた

瞳で坂本を見る。

「それは大丈夫だ。バルクホルン大尉、相手はただの民間人だ」

「だがウィッチなのだろう」

「という事なんだけど……トウルーデは見えないものね、あの大きな魔方陣を」

資料の中には記録写真はなかった。

なのでミーナの記憶から念写の形で出された魔方陣の図が添付されている。

見た時の印象もあるので差異は否めないがと前置きして、並べた写真を説明する。

あの日、海に突然現れた小林敦子が作った魔法シールドの文様、外殻の一番外側大輪は二重の光線で結ばれており、籠違いに回っていた。

その内枠の文字が入る箇所、英語圏では多い古語聖句が回る部分に、何種か扶桑のものとして読める字があったが、正確に読めたのは「梅花零落夜粉」の部分だけで後は読み切れなかったため息を落とし、さらに内輪にある華紋は細かすぎて映し出せなかったと言った。

「扶桑の字だな。少佐のものとは違うのかという点を聞きたいな。後素体は一緒なのだから流派や術式を読む事は出来なかったのかという点と、私の正直な感想を言えば……この魔方陣は、どこか違う感じ、ちぐはぐな感じがする」

何枚かシールドのイメージに目を通したバルクホルンは、自分のものとも違うそれを

訝しそうに見ていた。

勤勉な軍人たらんとする彼女は、出された物はいそいそですかと簡単な理解を見せたりしない。

何かしら足かがりになるようなものを探すように坂本に聞いた。

「ああ不思議な形だ。文字が扶桑のものに似ている事はまず認めよう。外殻の数字は簡略化されていない二重式算型魔法数字として変化のためにストックされたものをわざわざ別口で四則演算をするためともみえるが、漢詩は画角の固定化で固有術式の簡略化をしているともとれる。なにしろ文字とか数字がやたらにあるのはわかるのだが、私の感じたところで言うのなら扶桑の魔方陣よりリベリオンのそれに似ている感じがする」

「混ぜてる……そんな事があるのか、移民が増えれば当然そういう魔方陣も産まれるのだろうが……それにしてもあの女は三十越えているのだろう」

「先史的なものなのかもね、もう少し本人が落ち着いてくれたら私が話しをしに行けるけど……明日は、予定が正しければネウロイが発現する可能性が高い。明日以降でもう一度考えてみましょう」

基地に詰める年長組には戸惑いがあった。

坂本美緒は性格的に相手が年上だろうが、たいして顔色も態度も変えたりはしない

が、他の二人は中年女に対してどういふふうに接したらいいものかと考えあぐねていた。

それ程にウィッチの世界は若い。

若く無ければ力を存分に使えない魔力の期限があるからこそ今を頑張っている。

二人は突然舞い込んだこの問題の最初の部分にまだ足を踏み入れる気持ちにはなれなかった。

それが不安でもあった。

「坂本少佐……その、まだ不明な要因が多い人物に宮藤やリネット軍曹を付けるのはどうだろう……危なくないのか？」

伏せた目で本気を隠すように聞く。

妹の姿と重なる少女が、得体の知れない中年女に付き添わされているというのがバルクホルンにとつてもっとも気を揉ませる事になっていた。

「はっはっはっ、大丈夫だ。小林は宮藤をどうこうできるようなヤツじゃない、リーネ共々仲良くやってくれている」

「いやしかし、相手は、いつコの手の魔方陣を出すのかも解らないんだぞ」

「大尉がいなかった間でも仲良くやって来ている。むしろ私達がやたらに話し込みにくより和気藹々とする事だろう」

「だが……」

「心配よね、お姉さんは」

坂本の言葉に納得を示さない顔。

それに口元を抑えたミーナの柔らかな笑みが重なり、バルクホルンは顔を真っ赤にしていた。

「ちつ違う!! だから、宮藤のように隙の多いヤツは……その相手の魔女にやり込められてしまうかもしれないという事をだなあ!!」

「はっはっはっ、バルクホルン大尉。その点は安心しろ、小林自身、人を利用出来る程周りが見えてない。……そんなに心配ならば大尉が会ってみるか?」

「いや、いい……とにかく問題がなければいい」

耳まで赤くしたバルクホルン。

苦笑いのミーナ。

坂本は資料から離れ窓の外を見ていた顔に笑みを見せると、心配を隠せないバルクホルン大尉を見て言った。

「ちようど下に来ている。ここから少し見てみたらどうだ?」

鉄枠の窓の下、下といっても遙かに下にある滑走路に指された坂本の指、バルクホルンは慌てているのを見られないように、しかし少しばかり前のめりの姿勢で窓に顔を寄

せた。

引つ詰め髪の眼鏡、見るからに年上の女の姿に。

「あれが例の女か……それはわかったが、シャーリーは何をするつもりなんだ？」

基地から海に向かうゲートの前、噂の女になった小林敦子の前に水着なのか下着なのか？ 赤味を入れた栗色髪を潮風に靡かせたシャーロット・E・イエーガーが仁王立ちしている。

とてつもなく珍妙な出会い頭を司令室の窓から三人は見つけていた。

「お手並み拝見だな。小林を一気にこちら側に引つ張り込む秘策があるらしいから」

「そんなの、あったの？」

ガラスに顔を寄せたミーナは坂本の緩んだ口元に怪訝な顔を見せる。

「はっはっは、あつたのだろう？ だから今から試すのだし」

中身は知らない、だがそんな事は簡単さと言いつつ切ったシャーリーのやり方を見学しようという笑みに、ミーナとバルクホルンは問題が起これなければ良いがと眉を顰め、事の成り行きを見守るにした。

「……ハレンチ学園リターンズ……」

小林敦子は走りすぎて道に迷っていた所で目の前、フレンドリーに挨拶をする二人を見て目を背けていた。

それを凝視してしまつたら、心の籠が外れてしまう。

そのぐらいに心臓は激しくドラムを乱れ打っていた。

眼帯少女の坂本の水着。宮藤芳佳のセーラーと水着。リーネの白パンツ。

どれも度肝を抜く出で立ちで、それでも少しは自分を抑えて来られたと思つていたが目の前の二人はもっと、斜め上に何かがほとばしつていた。

「よー!! 初めまして。小林……亜子さん? 待つてたよー!!」

「違うよおーシャーリー、顎さんだよおー」

「どっちも違うわよ!!」

背中を向けながら思わずいきむ。

亜子と間違ふのは有りそうだが、猪木でもないのに顎呼ばわりは勘弁ならぬと顔だけ横に、目だけ二人に向いて。

「小林敦子よ……」

「うーっ、そうだー、芳佳そう言つてたしいー、あっちゃんだ」

「おー、あっちゃちゃん。よろしく!!」



「あつちゃん……もうどうだっていいわ。ところで何の用事で私を待ってたの？」  
アイドル集団の一員のように呼ばれるのは年甲斐もない恥ずかしさだったが、そんな事より目の前のハレンチ指数がメーター振り切りなのが気になって仕方がない。

「ねえ……あんた寒くないの……」

目だけの抗議はシャーリーと呼ばれた少女の姿に釘付けだった。

激しくローライズな下着に、トップスはお揃いのブラ。

フリルで飾ったパステルピンク、ハーフカットのカップからはあふれ出しそうな柔らかな果実が二つ。

質問をしておきながら敦子は手を打っていた。

「あつ、そっか、グラビア撮影していたとすれば問題なし。えーと私は小林敦子。小林さんでいいわ」

切り返しは早かったが、やはり気持ちの重荷までは動かないのか？ 棒読みな挨拶。

そして正面で見るシャーリーの姿は思いの外眩しかった。

見せて恥ずかしくない肢体というものに、ハレンチどーよ？ という思いと、グラマラス万歳の嫉妬が頭の中で回る。

「……良い所だもんねー、うんうん写真撮るに向いてる……」

なんとか自分を保たせようとする敦子の前に、もう一人の少女の姿に心が割れる。

なんとか保っていた脳天に景気良く五寸釘が刺さる。ダメだろうこれ、縞パン見えてる……

あどけなくいたずらっ子特有の嬉し目、息吹の若草を反映した瞳と白いリボンも可愛らしく跳ねるツーテール。

どうみても小学生少女、その下半身露出に耐えられる大人がいるのならば、それはアウターゾーンに消えて欲しいロリコンだ。

敦子の心は少しずつ沈むと、耐えられない羞恥に背中を向けてトボトボと歩き出した。

いくら坂本に、そういう制服なんだと説明されていても、はいそうですかと受け入れる柔らかさがまだ敦子にはなかった。

「ねえねえ、あっちゃん!! わたしルツキーニね。こっちはシャーリー。よろしくー!!」  
なのに一人反省している敦子の前にルツキーニは飛び出していた。

元氣いっぱい顔で。

「あーそお!! ルツキーニさんね!! なんで下穿いてないの!!」

受け入れ体勢はいまだ覚束ない敦子だったが、ここから逃げられない覚悟はしていた。

もうこうやって飛び出してくるのならば一人ずつでも聞くしかない、自分の前に

迫った子猫を捕まえた。

「ねえ!! どうしてなの!! どうしてスカート穿かないのよ!! 女の子は下半身を簡単に見せるものじゃない!! 冷えたらお腹壊すでしょ!!」

いきなり捕まったルーキーには顔を固まらせていた。

改めてこんな事を聞かれるのは初めてのうえに、大人の女に歯を食いしばって迫られるのはご機嫌に良く無い事だと直感で理解していた。

「あつちゃん怖いよお!! いーだ!!」

捕まえられた手を解き、遠目に立っているシャーリーの胸にUターンで飛び込んだ。

白い果実の柔らかい谷間に。

揺れる若々しいそれにさえ、腹に心棒が入る程立ち上がる嫌気を任せて敦子は迫っていた。

「もう、いい加減本当の事言いなさいよ……なんであんだ達は下穿かないのか!! 教えてなさいよ!!」

「ふっ、ふっふっふっふっ、あつちゃん。その質問に答えるために私はやってきた!! 私の名前はシャーロット・E・イエーガー、ここに立つウィッチだ!!」

戻って来たルッキニーを抱き、片手で敦子を指差したシャーリー。

不敵な笑みは足先から指先までを角度良くポーリングして見せると右手で髪を搔き

揚げて言った。

「下を穿かない理由、それはウィッチが美しくあるための基本だからさ!!!」

語尾のさの字がリフレイン。

頭の中に直通する言葉は、シャーリーの自信満々な立ち姿にもおされ力を持っていた。

下を穿くといつてもスカートの文化が著しく低いここでは論議のしようがない。

ならば、これはこうであると事が全てであると決めて意義と意味を強制的に植え付けてしまえば良い。それがシャーリーのごり押し作戦だった。

そして敦子の脳は限りなく夢見主義で、強い押しに圧倒的に弱かった。

恥ずかしいという事など顔のどこにも出ていない相手の言葉に半ば吞まれながら聞き返した。

シャーリーは人差し指を余裕綽々で揺らす。

「まっ……魔女は美しくあるために……スカート穿かない」

「ちつつちつ、違うぜあつちゃん。美しい者にとつて服を着て肌を隠す事は罪に等しい。ましてや世界を守るために戦うウィッチを名乗る者が足を隠すなどもつてのほかだ。美しい者は美しい姿を見せて空を舞う。そうであるべきなのだよ」

「美しい姿を見せて戦う……」

不敵に顎をあげ、天を指すような遠い視線。

自分にここまで酔えるものなのか、それさえ余裕なのか、自慢気な顔のシャーリーにルツキーニは抱きつき賞賛の言葉を甲高く叫んでいた。

「かつくーいー!! さすがシャーリー!!」

だが上で成り行きを見つめる二人と敦子と坂本以外は固まっていた。

「あつはつはつはつはつ、そうかー、それはいい、ウィッチはそうでいとなー」

「そんなごり押しが通用するか……バカリベリアン……」

「あー……余計に話しくく成りそう……」

上で坂本美緒は大笑い、バルクホルン歯がみして顔をそらし、ミーナは額に手を当てていた。

やっとこの場に追いついた宮藤とリーネもまた言葉なく、微妙な空気が漂う場に固まっていた。

誰もがこの壮大な失敗劇に次の言葉を失っている中で、敦子の思考は夢の方向に舵を切っていた。

心を動かす言葉があつたのだ。

「美しく……戦う……、そうよ、魔法少女は変身すると美しくなる。場合によっちゃ髪の色も量も変わって美しく可憐になる……そういう事だったの……」

変身する少女の心を持つ敦子に響いた言葉。

美しく舞うために肌を見せている。

それは度合いというものを遙かに逸脱していたが、変身のそれと同じではないのかというステキな考えに一直線に繋がっていた。

「そう……だったら……理解できるわ」

周囲には思わぬ言葉だったが、敦子にはレインボー必然がごとく脳に花が咲いていた。

魔法少女は変身する、変身シーンはいつだって脱衣である。

脱ぐのだ、自分を脱ぎ捨てて悪と戦うバディーへと生まれ変わる。

花色虹色に囲まれてフワリと脱衣、そして悪と立ち向かうためのパステルカラーの衣装を纏う。

「つまり……脱ぐのね、脱ぐことが第一歩なのね……」

膝からがつくりと前のめりに倒れ、石畳に手を付いた敦子は風に晒されるプリンのように全身を震わせて顔を上げた。

その輝く瞳にウィッチ達に衝撃が走っていた。

「だったら!!!」

碧い稲妻は走っている。

宮藤とリーネの前、敦子はスカートを脱いでいた。

体の弛みは隠せないが大人の女であるからして、金のかかった黒と薔薇の下着は見せて恥ずかしいものではなかった。

ラ・ペルラのブラックシルク、透けて地の部分が少なくともしつかりとしたホールド感を持つ高級下着セットは毎回ボーナスで買っている自慢の一品。

少ない給料の中でも頑張って買いそろえ、三十代になるとブラとショーツの色違いを許すほどルーズになる者が多いがそれを許さず一揃えを続けたからこそ、見せてしかるべきとスカートどころか上着も脱ぎ捨て走っていた。

「飛んでやるう!!! 私は魔法少女なのよ!!」

クロスアウトが第一歩なのは昔からわかっていた。

何十回何百回と魔法少女のアニメを見続けた。脱皮して自分以外のものになる事が必要なのはわかっていた事だったが、いざ現実と照らし合わせたら羞恥心が前に立つて飛べなかった。

それが当たり前の現世から来た敦子の常識だったが、あろう事かシャーリーの作戦がぶち壊していた。

そしてまっしぐらに基地から伸びる滑走路の突堤を走って行く。

後ろを宮藤とリーネが追いかける。

「待っててください!! あっちゃん!!」

「そっちは海ですう!!」

陽気に囃し立てるルツキーニをよそに、シャーリーも目を開いた顔で。

「すげー、やっぱり扶桑の魔女って違うなー、記憶無く立って飛べるんだ?」

「ねえねえシャーリー、で? 何で飛ぶの?」

「あつ……」

素足のまま駆け出す敦子。

何で飛ぶんだ? ストライカーユニットも何もない状態で雄叫びを上げている後ろ姿にシャーリーは口を開けたまま呆然としていた。

「普通は止まるだろ……止まる……はず」

「止めろおおお!!」

上から響くバルクホルンの声。

それに反するように大笑いをしている坂本の声。

手を伸ばすが絶対に届かない宮藤とリーネ、ワクワクで飛び跳ねているルツキーニと後の祭りをどうしようかと額を抑えたシャーリー。

そして一心の期待に応えて敦子は飛んでいた。

「美しく!! 華麗に舞って!! ただいま参上お……おー!!!」



考えなくても解る結果、突堤の先をポンと飛び出した敦子の体は一瞬で急降下に入り、後ろで見ている者達の視界から消えていた。

後につづく、おー、の残響と共に。

「美緒……ちよつと……笑つてないで助けに行かないと!!」

司令部に詰めていたミーナとバルクホルンは騒然とし、下で事態を見た者達も声がかかった。

いくらウィッチはいえ突堤のあの高さから落ちたら無傷ではられない。

とんでもないショッキング映像のライブ放送をウィッチーズ達は目の当たりにしていた。

「……落ちてるうううううううう」

そして飛んだ中年は、足が地面から離れたところで現実に意識が引き戻されていた。

当然のことなのだが手をばたつかせたからといって体が浮くわけでもない、真正面は遺蹟の柱が林立する海、青い空と真っ赤に立ち上る意識と冷えた肝。

「なんで……飛ばないのよおおおおお」

瓦礫に突っ込んだから痛いどころではないだろう、それだけが怒りとなって声を挙げ

ていた。

「痛いのはもう嫌なのがいいいいいい!! 止まりなさあああいい!!」

誰もが息を呑み、冷や汗で止まった時間の中に碧い輝きは一気に広がっていた。

水面の並を弾かせて、青と白、太陽の輝きでも街灯の光でもない軌跡のラインは大きな円を一瞬にして花開き、基地を覆うほどの魔方陣が発生していた。

「はっはっはっはっはっ!! あはっはっはっはっ!! 凄い!!」

笑う坂本のとなりミーナは書類を落として呆然と目の前に広がった魔方陣を見ていた。

同じように、窓から身を乗り出していたバルクホルンも呼吸の音だけを響かせて目を丸く見開いている。

突堤の先を円の中心にして広がった光のライン。

ウィッチが持つ魔法力を示す基礎魔方陣の図に基地に詰める全ての者達が言葉を無くしていた。

「あっちゃーん!!! あっちゃーん!! 大丈夫!!!」

花開いた方陣の中で、唯一走って突堤の先から下をのぞき込んだ宮藤は水面に浮かび

俯せに倒れている敦子に必死に声をかけていた。

魔方阵が水にぶつかると直前に開いているのだから、怪我はしていないだろう予想はできるが、何せこの高さだ、完全に無傷とはいかないだろうという心配だけで声を張り上げていた。

その張り詰めた声を耳に、敦子は怒りに打ち震えていた。

「なんで……なんで飛べないのよ!!!」

「あっちゃーん!!!」

「何よ!!! どうして飛べないのよ!!! ちゃんと脱いだじゃない!!!」

返す言葉がそれしかない程、羨望の空に向かってたんこぶを作った額が目を向けて叫んでいる。

「ストライカーも穿かないで飛べるわけないですよー!!!」

「大丈夫かー」

続くリーネの声と、驚きながらも笑顔のシャーリーを睨む。

「脱げば飛べるんじゃないやなかったの？ 大人騙してどういうつもりなのよおおお!!!」

逆鱗のだみ声は下から煽る風に乗って景気良く聞こえる。

敦子の無事をしらせるには十分過ぎる声に、落ちた姿を見ていたメンツはホツとしていた。

そして司令部で事の成り行きを見立てていたミーナは軽く目眩を起こしていた。

壁にもたれたまま長いため息を吐くと、となりで大笑いを続けている坂本を恨めしそうに見た。

「やっぱり……扶桑の魔女はとんでもないわ……」

「同感だ、信じられないバカ者じゃないか……」

ミーナほど腰砕けにはなっていないが、飛び降りの瞬間に力が入ってしまったのか、バルクホルンが掴んでいた窓枠は大きくへし曲げられている。

だが坂本美緒は大喜びだった。

「見ろ大尉、それにミーナ。この大きな魔方陣を」

驚きを継続させるそれは、見ろと言われなくても目に入るもの。

ミーナもバルクホルンも司令部という高い場所から故に全景の見える巨大円陣に領いていた。

ここでは最大級のシールドを張る宮藤芳佳の基礎方陣の大きさ遙かに上回る光の円陣。

そこに溢れる魔法力の燐光を確実に感じ取っていた。

「確かに大きい……魔力を感じる」

「……普通じゃないわ……? 真ん中の華紋は何かしら?」

驚愕に違いの顔を見合わせた二人、そして坂本だったがそのまま観賞や物事を整理する時間はなかった。

耳に鳴り響くネウロイ襲来の警報に、驚きで浮かれた心はすぐさま地面に足を下ろし、戦いに赴く重き心を抱いていた。

「また来襲予定がずれたな!! 全ウイツチ出撃準備!!」

走るさかもとの後ろをバルクホルンが続く、司令部からミーナが全館放送を飛ばす。

ネウロイの出現に対して早さを武器に、敦子の飛び出しに惚けていたシャーリーは引っかけていた上着を肩にルツキーニを連れたハンガーに向かって走り出す。

「ちよつと……ちよつ、私はどうなるのよー!! 何が起こってるの!!」

救助もなく少しずつ消える魔方陣の上で海に浸かり始めた敦子は上を見て怒鳴った。

「宮藤、リーネ、小林を救助したら後衛のミーナに従って発進しろ!!」

すでにユニットを身につけ空を飛ぶ坂本、バルクホルンと叩き起こされたハルトマンも後に従って空に上がる。

それに続くようにシャーリーとルツキーニが駆けていく。

自分とは違い、軽やかにして速やかに空を昇っていく少女達を見る敦子は、海に沈みながら唸っていた。

「やっぱり年齢制限があるんでしょ!! 頭きたー!! ふざけるんじゃないやありませんよ!!」

若くないと飛べないのではという怒りで大きく拳を振るって、ネウロイという異形の敵に向かつていく背中を見送っていた。

そしてこの日、初めて冷静にネウロイと、この世界の魔法少女達が敵とする相手を見ることになる。

今は海でアツプアツプしている敦子に備わった固有魔法を知る事になるのだった。

## 猛きウイツチの激戦……非凡な敦子の防戦

「飛ぶのは自分の力じゃなくても……いいかもしれない」

小林敦子はパンツ丸だし娘リーネに背負われた形で空を満喫していた。

つい先ほどダイブ・フォー・ユーをかました突堤はすでに眼下を離れ、割り箸を引つ張ったような細い影になっている。

落ちた直後は怒り絶頂だった。

腹の中にマグマがあるのなら、自分はゴ〇ラにでもなれる。

口から何かが出る勢いだったが、宮藤とリーネに素早く抱えられて空に飛んだ事で速やかな沈静化を得ていた。

グンと遠くなった陸地を、目を細めて見つめながら物々しい黒い棍棒のような銃器を持った二人に聞いた。

「ねえ、どこいくのよ。もういいわ、空は満喫したから……病室に戻ってよ」

正直敦子は空に行くことに飽きていた。

何せ眼下に町が見えるのならば楽しみは多かったのだが、進むほどに陸地を離れ目の前にあるのは真っ青な絨毯よろしくの海オンリー。

海流に興味があるのならばいざ知らず、蒼天の海を眺め続けるのは解きようなない青一色のパズルを見ているようなもの。

見るもののない世界に飛びたかった興味はごっそりと削がれていた。

「……寒いのもう帰っていいわ」

耳を押さえ、別の誰かと話しをしている二人に向かって、タクシーにでも乗っているような言いぶりは現状を苦く思っていた。

勢いで飛んだ。

正確には飛び降りた。夢と希望を抱いてマップの体は心中一直線の航路の果てで海を泳ぎ、体は元より心の芯まで潮水に洗われてしまった。

そのせいで風切る早さの空の中で、燃え立った希望以上に色々ものが凍え始めている。

「ねえ……聞いているの？ えーとリーネちゃん？」

「ネウロイが迫っているの……このまま戦列に加わりませう」

リーネの襟首を引いた敦子に併走して隣を飛ぶ宮藤が答えた。

太陽光に鈍く光る物干し竿のような鉄の塊を持った少女。

バランスの悪い凶悪な兵器を抱えた顔で、ハの字に下った眉の顔を向ける。

「あつちゃんも前に見たと思うけど……」



「見たけど、それはまた今度にしてちょうだい」

どこかで聞いた響きと思いなながらも否決は早かった。

空は寒いというのを実感した肌がそう言わせてた。

落ちた後、救出に来た二人は上着を持って来ていたが……例によつて例のごとく下に穿くものは持つてこなかった。

おかげさまで、黒のスケスケタンガ一丁・所謂ティーバックのまま大人の女にあるまじき下半身剥き出しで空の散歩をしている。

「このまま誰かに出会いでもしたら、痴女扱いを受けるわ……」

空で誰に遭遇する心配がという疑問は蚊帳の外で。

楽しいという思い込みで、おんぶをされた状態ながらも空にいた敦子の羞恥心は急に復活しており、更に底冷えの状態は別の問題を腹に与えていた。

「いいから早く帰して、病気が悪化しそうなの。シャワー浴びたいし、ご飯とかねえ」

「無理です、もうすぐ支援空域に入りますから、それにネウロイを見て何か思い出せるかもしれないと、坂本少佐が……」

ジャケットの襟を引かれたリーネは、自分の背中に馬乗りになつてゐる敦子の顔を下から仰ぎ見ていた。

坂本美緒の指示は、小林敦子の救出及び後方からの支援に参加させる事だった。

記憶に障害を持つていると考えられている敦子に、実戦の空気とネウロイを見せる事で正気を取り戻そうという、いかにも坂本らしいシヨック療法。

是が非でも連れてこいという指示に宮藤とリーネは従っており、敦子の帰投願いは二の次という状態だった。

「とにかく、遠目でいいのでネウロイを見てください。危険はありません、私とリーネちゃんがんばつちり護りますから、でもあつちゃんも魔力を蓄えておいてくださいね」

「いや、その、それは今度見るから……今日は戻つてよ。お願い」

敦子は自分を見る真剣な視線から顔をそらし、できるだけ感情を見せない棒読みな声で頼んだ。

空を飛び続ける事は飽きたとはいえ、他力にして苦勞のない空中散歩事態は気に入っていた。

また次の機会にこの二人に町の上でも連れて行って貰いたい。

身勝手なプランを考える程に空は楽しいのだが……しかし現在の飛行における問題は大人の敦子にとって深刻なものだった。

魔力ではない別の物が下腹部に蓄えられていたからだ。

「……空にトイレって、ないわよね……ダメ、大人なんだもん……漏らすなんて絶対にダメ」

腹から伝わる尿意のグライコはまだイエローゾーンにいる。

ここから戻るぐらいの我慢はできる。

だがトイレに行きたいというのを素直に言えない、子供達に背負われている今格好の付け所なんか歯牙にも掛からぬ問題なのだが、そこを折って頼み込むのはどうしてもいやという感情に従っていた。

あえて強気に、決意も硬い拳を奮って敦子は宮藤に向かって言った。

「あのね、寒くてそろそろ限界なのよ。お腹が。だから力尽きちゃう前に戻って欲しいの」

それは深慮ごちやまぜの遠回し過ぎる要求だった。

大人である事を全面に出し過ぎ、ストローレートに頼む道をあえてクロスワードにした結果は謎でしかなかった。

声を高くして言えば、堰を切りそうな貯水率の前で「花を摘む」以外の優れた遠回しと自信を持っていた敦子の顔を見て宮藤は深く頷いていた。

「解りました!! 早く行きましょう!! 力が尽きてしまつたらではネウロイから身を守るのも大変ですから!!」

「いやいやいや!! そうじゃない、違うそうじゃない!!」

「行きます!!」

「いかないで!!!」

急に切っていた風の音は大きく鳴っていた。

今まで以上に肌に当たると冷気に下腹部に力が入る。

「止めて!!! 行つてはいけない所に……いっちゃう……」

歯を食いしばり、体を痺れさせる波の中で、敦子の熾烈な戦いは始まっていた。

「早い……」

坂本美緒は眼帯を親指でめくりあげ、アメジストの輝きを見せる魔眼で斬る風の中を更に裂くように進むネウロイを追っていた。

追うというよりも、釘付けにしないで相手を見失いそうな早さの中で501の仲間達は体をくねらせ激しい空流の中での応戦を続けていた。

「美緒、コアは?」

「まだ見えない、というか数が多いうえに素早い……ダミーの中に居るはずなのだが」  
「ダミー……これは衆群蜂の動きよね」

状況を俯瞰するために、衆群である敵の中に入らず円廓からミーナと坂本はコアを捜していた。

相手の数は多いうえに小さい、コアを一つとすれば多すぎるダミーが綿飴の雲のごとくいるというやつかいな状態だった。

こぶし大の虫達が黒い影を作るほど重なり合った形で飛んでいる。

虫型だが、羽根は固定で形だけを見せている。

動きが速いため羽ばたいているようにもみえるが、分裂して動く数の多さで風を編み目のように区切る音が羽音にも聞こえ錯覚を起こさせている。

固まって移動する姿は、積乱雲の柱がそのままこちらに向かっているという状態だ。

故に全体が動く早さはないが、中身の素早い無視達と多さにどこにコアがいるのかを探り出す作業は手間取り、501の魔女達は周囲を警戒して飛ぶという待機状態になっていた。

素早く斬り込む動きはエッジの立った鋭いナイフがごとく、黒い群がりにぎつくりと三角の斬り込みを入れる程の動きで次々に虫を落とす二人組も、その数の多さにうんざりと口を開いていた。

「ネウロイ多すぎー、本体のコアはー」

「集中しろハルトマン、いつ一斉攻撃にうつるかかわからない相手だ」

「だつてさー、疲れるよー」

斬りみの後をすぐさま埋める密集飛行型ネウロイ。

二人は背中を合わせて何度ものアタックを繰り返していたが、滝壺に落ちたら這い上がれないというあれを、地दैいく密度の虫達にお手上げ状態になっていた。

寝起きで飛び出してきたエーリカ・ハルトマンは欠伸を片手に、熱くなった銃身を風に晒していた。

ショートボブの髪から、ひよっこりと飛び出した耳を撫でる。

寝坊のツケで朝飯を食いつぶぐれていた、空腹の腹が虫達の羽音と合唱をしそうな程響く。

「おなかへったーよー」

「中尉、気を抜かないで」

いつになく執拗にして密着するネウロイの動きに、痺れを切らせ始めている仲間達をミリーナが叱咤する。

ネウロイは不敵で不正確で、予想のつかない動きを見せる怪異。

最近のパターン化して来ている部分もあるが、それでも太古から繰り返し人を襲う正体不明の物体である事は変わらない。

こうして向かい合い互いが距離を取った待機の状態で、中身のコアを見せない分離した欠片達の姿は不気味にして危険だった。

両腕に、MGを構えたバルクホルンは膠着する戦場に眉をしかめていた。

「少佐、もう一度当たって見ようか？」

「すまない大尉、まだ見えない……あるとすればこの虫の柱の真ん中あたりかもな」

「それは貴女の直感でしょ」

同僚のエネルギーを叱りながらバルクホルン大尉も遅い侵攻ながらも、ギリギリと自分の領域に迫る相手の姿に眉間の皺を深くしていた。

仲間が緊迫の中で固まってしまわないように、坂本は自分の予想などを織り交ぜた返事をするが、ミーナは不確定な攻撃を許さないとすぐに意見を遮断する。

「そうだ。ミーナに従って今しばらく待つてくれ」

「それはかまいませんが……弾切れになりそうです」

美緒を護る形で前面展開していた金髪眼鏡の少女、ペリーヌ・クロステルマン中尉は纏まりながらも攻撃には一斉拡散をする相手に持ち技であるトネールを食らわした乱れ髪で、全隊が持っている不安を告げた。

日差しに冴える青色の上着に、襟を飾る小さなスカーフ、毅然とした態度ではあるが圧倒的な量を見せる相手に対して少しの疲労が見える。

「わかっているペリーヌ、出来る限りで上手く間を持って応戦してくれ。ミーナ、何人かを下から弾の補充をさせるか……」

「坂本さん、後方3000メートルの位置に到着しました」

作戦指示の密度を上げていた坂本の耳に、緩い少女の声飛び込んだ。

「宮藤か、小林は一緒か？」

宮藤芳佳の幼い声に、コアを追う目のまま指示を与えた。

現状では不確定で不気味過ぎる相手の中に、小林という荷物を抱えて入るのは危険。その場所に待機するようにと。

群れのネウロイ。

小さな虫達は無軌道に、しかしかたまりを維持したまま少しずつの移動を続けている。

波間に写る景観を濁らせながら、真っ直ぐに。

出方が不明なネウロイ。

後方支援という名の元に敦子と宮藤、リーネは離れた所から海の上に立つ黒い柱を見ていた。

水面に映り込む影のせいで、海から生えている円柱にも見えるそれを敦子は唇を噛んだ顔で見えていなかった。



それを見る以上に自分自身の心配で頭の中どころか、体の全神経が働き続けていた。「あつ……あぶなかつた」

速度を上げて飛ばれている間、口を鋭角度合い激しいへの字に締め上げ、腹筋が無駄に割れるんじゃないかという程力んでいた。

今までお気楽OLで、イスに背筋を支えられた生活を送ってきた者として、つかみ所のない空の中で、唯一つかめるリーネの襟に力を入れることを躊躇い、自らを雑巾にたとえられる程体を絞ったのは初めての経験だった。

そうしなければ、奥底にたまったものを吹き出してしまいそうだった。

肌に刺さる冷気が緩和されたおかげで、後一步間違えば決壊するところだった下腹の堰を、足を絡ますように締め直し窮地を脱する方法を口にした。

「ねえ、海に触りたい」

既に病院に戻るという方法はなかった。

というか、戻る時間を我慢出来る自信も保証もなかった。

冷気が叩きつける寒さの中にはいなかったが、全身を巡る緊張の震えが小刻みに限界を知らせているから。

定期的に来る放水へのレベルは、ばっちりレッドゾーンに入っておりこのままダツシユで病院に向かわれたら……

「空に散るわ……」

プライドも大人の威厳も粉々に、無残に消えると確信していた。

そしてそれだけは絶対にやっつてはいけない事だと覚悟もしていた。

魔法少女を夢見た自分が、舞うべき空で……そんなものをまき散らしていいわけがないと。

へたばる顔のまま、自分の声に反応しないリーネの襟を引いた。

「ねえ、お姉さん海に触れたいの……ちよつとさー」

「無理です。今は作戦行動中ですから」

落ち着いた声は、前方に光る部隊の攻撃を見つめたまま答えた。

ヘリで言うのならホバリングの状態で前衛の動きを見つめる二人の顔は、張り詰めており、敦子の小言などに逐一応対するのを迷惑と目で訴えている。

リーネの前でネウロイを見ていた宮藤は構えた銃のまま、敦子の横まで飛んできた。

「あつちゃん、坂本さんからです。ネウロイは見えるか、だそうです」

どうしても海に行きたいと気張っている者の前でずいぶんと惚けた質問だったが、集中力は下腹部だけにしかない状態の敦子は眉間による皺の顔をpushしながら指差されている側を見た。

とにかく要求されている事をしないでこの子達は言うことを聞いてくれないのは、そういう強迫観念を感じながら見た。

海の美しい風景画の真ん中に、油絵の黒筆を落としたような不気味な景色を。

「あの、その、黒い塊は見えるわよ……見えたからもう良いでしょ、下に行つて」  
引きつった顔は、客観的なこたえを出していた。

ネウロイと呼ばれるおぞましい物体に対する恐怖よりも、自分の心をへし折りするような羞恥の魂に歯を食いしばつて。

ここからトイレという憩いの場には帰れない。

漏らすわけにもいかない、最後の手段は海に入つて有耶無耶にする事しかなかった。

もう単純な考えしか浮かばないぐらい、大人は参つていた。

懇願する目で冷め切つた笑みを浮かべて頼んだ。

「私はああああ、海いいいい、海にいいいい、入りたいの!!!」

「それはちよつと無理で……」

迫る敦子の顔にリーネは恐怖していた。

今までも年上過ぎる相手に対して一歩も二歩も引いた所から話しをしていたのに、近い距離で荒すぎて粗目を感じる息の声に。

この状況下で、目の前に人類の敵であるネウロイを見ている場所で海に入りたいなん

て常識がなさ過ぎで怖い、正直それにつきる顔だった。

途方に暮れているリーネをかばい、空をクルリと回って宮藤が話し懸ける。

「あつちゃん、海はまた今度入りましょう。今はネウロイをしっかりと見て」

「あの変なのはもうどうだっていいでしょ……しっかりとって……私は詳しくないわよ。そんな事より」

「お願いです。もつときちゃんと見てください!!」

「見たら……我慢できるの?」

「我慢? そうです今は海を我慢してネウロイを見て下さい!!」

かみ合わない会話の流れとは別に、何か体がから流れ出そうな危機を抱えた敦子は最悪の事態をよぎらせていた。

海の上とはいえ、かなり高い所にいる状態では飛び降りるなんて行動に出た途端に抑えていたものが溢れ出てしまう。

まさにまき散らした。

それはできないという必死なプライドが心を支え、本当ならば怒鳴りたい所を堪えた真つ赤な唇は頑張つて聞き返した。

「あの……ひいー、あれよお、あの塊の棒のお、右下の方に赤いのが光ってるうう」

「赤いの?」

「リーネちゃん、見える？」

必死の返答を前に二人の少女は首を傾げていた。

二人には見えなかったのだ。

敦子の指先が震えながらも示している位置は、黒い塊と化した衆群のネウロイ達から少しだけ離れた所にしか見えなかった。

目を凝らし互いを確認する顔は、もう一度示された先を見て顔を合わせた。

「芳佳ちゃんには、何か見える？」

「私には見えないよ」

惚けているわけではないのだが、こうして間延びする時間に怒りの導火線と決壊への膨張を抑えられない敦子は大きな声で指差して言った。

「そこ!! ああ黒い棒の下の方、海の近くのこと……いるでしょ!! もういい、ねえ、いい、

本気で私はやばいのよ!!」

「小林!! もつと正確に!!」

力を入れられるのならば、この幼い二人の少女を張り倒してしまいたいと思う程に気持ちだけがいきり立っていた敦子の耳に、目の前に出された小さなイヤホンから坂本の声が響いた。

「それがコアだ、今はどこにいる。魔法力を繋いでリーネに見せるんだ」

坂本は自分では見つけられないし、言われた位置を見てもコアを発見出来ていなかった。

なのに敦子には見えているそれをコアだと信じていた。

「小林、コアは今どこにいる。お前の目に映っている赤い物体がそうなんだ」

まくし立てる美緒の声に、敦子は切れた。

切れたといつても全身で抗議する訳にはいかない苦しみの中悶えよじれて、涙を吹き出して言い返した。

「ずっとそこいるわよ!!! 右の下の方よ!!!」

「私には見えない、だからもつと正確に」

「正確に言っているわよ!!! 私の指先を追いなさい……あああ」

「あ? あの方角ってなんだ?」

「怒鳴らないで……集中出来ないでしょ」

「すまない、集中して見てくれ!!」

相手に怒りの感情がシンパするのなら、敦子の声からそれをくみ取るだろう。

だが坂本美緒にとって相手の怒りなど、この非常事態の中ではどうでも良いことだった。

そして敦子は期せずして集中を必要とされていた。

自分の下腹部を支えるために、意地になった集中力が魔力発動であるハムスターの耳と尻尾を浮かび上げさせていた。

「リーネ、小林と手を繋げ、魔力を繋いでコアを見つけて。宮藤、小林を抱えてリーネを支援しろ!! グスグスするな!!」

普段の明るく前向きな剛胆さが、怒りの雷を纏って鼓膜を叩く。

一番階級の低い少女達は慌てて作業に入った。

しかし敦子だけは納得出来なかった、というか非常事態なのは自分の方だと奥歯を破碎するほどに食いしばって叫んだ。

「いつになったら私の言う事聞いてくれるのよ!! 真面目にやばいのよおお!!」

「状況がやばいのはわかっている!! お前の協力が不可欠なんだ!!」

雄叫びも空しく、叫ぶ体はリーネの横に、腰の部分を抱くように宮藤につり下げられた事で、決壊への最終段階は確実に進んでいた。

「私の人権んんん!!!」

響き渡る悲鳴の中で、リーネは感電する程太く流れ込む魔力繋ぎの中で、銃を構えて目を開ききっていた。

「見えました……赤いの……」

ぶつくりとした唇をきつくかみしめ、スコープから先に鎮座する目標に目を細めてい

た。

はつきりと見えるネウロイのコア、多面体のルビーはなんの護衛も付けずに漂っている。

撃つてくれと言わんばかりの信じがたい光景の前で、はつきりと交信した。

「護衛も何もいません、ただ浮いています……後何かカウントしています」

今まで見てきたネウロイのコアにはない表示を、リーネは出来る限り詳しく坂本に口伝した。

一方で、自分の隣を飛ぶ宮藤には見えていない物体に、首を傾げながらも本隊の指示を待った。

「どうするの？ まさか彼女の見ている物をコアだと断定しているの？」

美緒とリーネの通信を耳にしていたミーナは困惑の顔を近づけていた。

司令職でもある彼女としては当然の抗議でもあった。

未確定な魔力、自分の存在や周囲の状況を曖昧にしか認識していない敦子の能力を、はいそうですかと信じる訳にはいかないときつい目で美緒の前に立つ。

きめ細かな肌を揺らす、シビアな神経。



指揮官に必要な冷静な抗議を現した顔を近づけると。

「教えて、それがどういう事なのかを知らないままで展開するわけにはいかないわ」

生来きまじめなミーナの質疑に、少年のような冒険心を持つ美緒は、挑戦者の顔で鼻先を合わせると。

「安心しろ、退路を保てないような事は絶対にしなない。それに確認するのに時間はかからない。こつちも同時反抗で攻撃も仕掛ける」

「残弾を考えたら実験をしている余裕はないのよ。敵が自身を透過しているのならばすぐにそこを撃つべきよ」

コアだと考えられる物が自分達の目に写らず、透明化しているという事態が初めての事だった。

すくなくともミーナはそう考えて、ポイントに対して一斉攻撃をするべきという意見を坂本にしたが、意見に対して坂本は首を軽く振っていた。

「ミーナ、コアはまだそこに居ないんだ。だがいずれ彼処に来る……そういう事なんだ」  
不可思議な返答だった。

魔眼の目がポイント周辺を執拗に睨め付けしている事からも、未だに坂本が指定された場所にコアを見つけていない事はすぐに理解ができた。

「いずれ来る？ つまり」

「いまから240秒後に、コアは彼処に来るんだ」

迷いのない声は、自信に満ちた唇でミーナに告げると、それでも不足の事態に備え指しを飛ばした。

「シャーリーとルツキーニ、今すぐ基地に帰投し弾の補給空走を行ってくれ」

万全を期す事を、指揮する事で素早く示した坂本の背中にミーナは半ば諦めながらも納得するしかなかった。

「美緒、彼女が示した位置には何も感じられない。貴女の目にも映らないのでしょうか。それでも信じているの？」

「小林の魔力の大きさからすれば、これは必然なんだろう。本人が未だに気が付いていないから軽く見落としてそうになったが……間違いない」

不安はそこにあつたがミーナは飛び出しそうな気持ちを抑えた。

直感の冴え渡る魔女坂本美緒の言う事を見届ける余裕は少なからずあつたからだ。

目の前を飛ばす軍団は、歩みの遅いネウロイ。

いつ何時スピードを上げるのかという心配もあるが、だからこそ迅速な指揮は行われているという事実屈した。

ミーナの杞憂を横に坂本は次々に指示を飛ばしていた。

リーネから来る目標のポイントは、聞き取りにくいながらも正確に把握したが、それ

以上に面白い報告を聞いていた事で確信の目を輝かせて言った。

「なあ、ミーナ。小林の見ているコアが本物だったとするならば……私達は本当にすごいウィッチに出会った事になる」

「どういう事？」

「結果次第だが……大尉、指示したポイントに今から185秒後に攻撃をしてくれ。ハルトマン中尉、同じポイントで大尉の後5秒後に攻撃を」

的確に場所を示す指示だが、ポイントを飛ぶ虫型ネウロイは疎らながら。

潮騒を倍重ねにするような羽音を響かせる物体の中を、命令に習い二人は飛ぶ。

ミーナの心をヒリヒリと痛ませる中で、坂本もまた手にした銃器を構えていた。

輝きの魔眼を開き、敦子が指差し、リーネが知らせた方角に向けて狙いを定めて。

「さあ、はい……」

「行かせて……お願い」

本人の意思不在のまままで進行している事態を顧みる余裕は敦子にはなかった。

噛みすぎの唇と、首筋を走る力みのライン、脂汗の果てにあるのは、プライドと欲だけだった。

「ねえ……海に行かせて」

「もう少しですから集中してください。あっちゃん!!」ネウロイを撃つためにも……」  
下腹部を満たした波が、防波堤を越えるのは数秒足らずの中で、敦子の体を支えていたのは宮藤だった。

後ろから抱きつくように飛べない敦子をぶら下げて懸命に、出来る限り揺れを抑えた静かな状態で飛び続けていた。飛ぶといつても、場所を動かさずの状態で。

ホバリングは、隣で集中しているリーネと手を繋ぐために必要な作業だった。

スコープを除くリーネは、坂本に命じられるまま敦子の差す赤い物体に狙いを定めていた。

手を繋ぐといつても両手がふさがるため、敦子の方から肩に手を添えて貰うようにしている。

なにせリーネの持っている銃器は片手で狙いを定められるような安い物ではない。

魔法力を持っているからこそ、華奢な彼女にも持ち上げられる重量物。

軍隊で訓練している兵が使うにも両手は必須であり、そうしても手首を痛める確率が  
高い強い反動を持つ対装甲ライフル。なのに精度は少し低い。

故にリーネの魔法力によるコントロールが必要になる。

灰鉄の長い鼻は、指差されたポイントにカッチリと合わせられ微動もしない状態を保

ちながらも疑問を頭に浮かべていた。

敦子と手を繋ぎ、魔力を繋いで射撃をしろと言うのは良いのだが、当初自分にも宮藤にも見えなかった標的。

こうしてセツティングをおえた今でも宮藤の目には写らないコアを狙うという不可思議感。

近づくネウロイの塊から少し離れた右下方に光る赤い目標は、宮藤の情報からすると未だに見えず、近場を蜂の子が渦巻くように周回を続けているだけだという。

なのに、繋がった事で見えるそれは微動もしない真紅のコアなのだ。

現実にはいないコアは、敦子と繋がった状態のスコープの先に浮遊している。

「どうして……あそこなんだろう」

「後60秒!!」

構えたまま固まるリーネの耳に坂本の激が飛び姿勢を正したとき、そこには泣きも飛んでいた。

掴んだ肩に指を食い込ませる勢いで、ライブハウスでもないのに勢いよくヘッドバンしている大人が。

「お願い!! お願い!! お願い!! 海に下ろして!! お願いよおおお!!」

羽音だけが響く沈黙の無線に入り込んだ敦子の絶響。

リーネの肩懸命に揺さぶっていた。

「もう限界!! 早く下ろして!! 私が死ぬ!!」

「ダメですううう、今は、狙いが……」

「宮藤!! 小林を抑えろ!! なんとしても魔力を保たせるんだ!!」

遠目にもわかる騒動にミーナが飛び出していた。

任せてくれと手を振って。

魔力を使っている今、大人の敦子の力は半端ではない、抑えに入った宮藤芳佳は飛ばされまいときつく腰にしがみついた。

「あっちゃん!!! 落ち着いて!! すぐに終わるから!!」

「やかましいわ!! 私の人生が終わっちゃうわよ!!!」

半狂乱の敦子に、驚くリーネと頑張る宮藤。

「落ち着いてあっちゃん!!!」

ギリギリの時間を騒ぐ見苦しい大人小林敦子。

壊れた人形がカクカク動くように、下半身だけは固定された水飲み鳥のように。

目から吹き荒れる涙のしぶきさえ、この後保ち堪えられない自分の失態が浮かんでしまふ。

「私を海に解放しろおおお!!!」

「小林!! これはウィッチの誇り高き戦いだ!! お前もプライドを賭けて戦ってくれ!!」

10秒を切った時間の中で、坂本の声が怒声のエールを飛ばす。奇人と化した敦子の怒声は負けずと吠える。

「私だって、私の人格というプライド賭けているわよ!!! もう限界なのよ!!!」

「後5秒!!!」

「もういや!!!」

「3・2・1!!! ファイア!!!」

固定砲台として思い一撃を2発。リーネは予測の範囲を指した号砲を響かせていた。

自分の肩を持って跳ねる敦子を征した形で。

タングステンの弾芯は、空気を鈍くねじ込むように裂いて進み、後ろに残った硝煙の中で目を凝らした。

弾が進むその先を……

「えっ?」

まったく何もいない場所に向かって飛んでいた弾に、まるで吸い寄せられように一匹の虫型ネウロイが入り込んだ。

次の瞬間には真っ赤な破片を四散させ、それに続くように黒い塊として群れていたネウロイ達は白い結晶となって崩れていた。

自ら弾に当たった。

501の魔女達は皆そういうふうに見えていた。

撃つたリーネも、5秒差で撃つたバルクホルンも、後に続いたハルトマンも呆然としていた。

「なになに、どうして当たったの？ 当たり来たの？」

「わからん、だが……終わつたみたいだ」

前線を飛び続けたバルクホルンとハルトマンは自分達の近くまで、細かな破片となつて降るネウロイを見ていた。

山のようにそびえ、一つの塊のように群れていた虫達はあっけなく粉碎していき。魔物の最後にはふさわしくない美しい白滝のように落ちていく。

「すごいよ、リーネちゃん!!」

「わからないけど……やったよ、芳佳ちゃん!!」

突然消滅したネウロイを前に、後方からの斬激を食らわしたリーネは手を開き、自分をサポートしていた宮藤と抱き合っていた。

何が起こったのかは欲理解していなかったが、とにかく危険が去つたという喜びで互



いの体を強く抱きしめていた。

そして敦子は当然手を離されたので落ちていた。

喜びで手を離れた二人を豆粒のように見ながら、歯を食いしばった顔で、悲鳴も出ないほど踏ん張った口で、真つ逆さまに海に向かって落ちた。

落ちた時全ての榎は切れ、体は弛緩した安堵感で浮かび上がった所を助けに来た二人を怒らなかつた。

ただ泣いた。

「もう……殺してよ……こんな天国もういや……今日私のプライドが死んだわ……」と、二人に両手を持ってつり下げられるという、掴まった宇宙人のような形で帰投した。

朝から昼間たぎで起こった出動で、基地の中は騒がしく人が動き回っていた。

ハンガー周りを工具の箱と、レーンの整備を響かせる雑踏を避けたハッチ前で最後尾を守り基地に帰ったミーナは、坂本と話をしていた。

「美緒、小林さんの固有魔法、あれは……ラプラスの魔眼……なのね」

「……確率予測というよりも、確定予測を見るつてあれだな」

正直な話し、数の多いネウロイに対してコアを探して戦うのは珍しい事ではなかつ

た。

時間をかけるか、それぞれの魔法力を使って相手を拡散させコアをほじり出すか。それ以外にも方法がないわけではなかった。

ましてや今回のネウロイは進む足の遅い相手だった事を鑑みれば、時間をかけて潰す事は可能だった。

だが無駄なく倒すという意味では、小林敦子の持っていた固有魔法は有効な武器と認めざる得なかった。

「確信していたの？」

「いや、ただリーネの話しの中でコアの中にカウントダウンが見えると言われて……そうじゃないかと思っただけ」

確信はなかった。洞察力と直感だったという坂本の話しに、ミーナは深いため息を落とした。

危険は少なかったとはいえ、軍事行動。

不測の敵を前にそんな事を実行してしまえる扶桑の魔女を呆れた顔で見た。

「これで、自分で飛べるようになってくれたらいいが、まだまだ本人がどれも此も使いこなせていない状態だから」

心配を顔に浮かべるミーナを前に、坂本美緒は陽気だった。

使いこなせないという意味では宮藤と変わらない攻撃戦力外だが、巨大なシールドに加え、強力な魔眼を持つという事実は坂本の気持ちを強くする一つの薬にもなった。

自分と同じ魔眼持ちという喜びで。

「そうね、まだ飛べない人なのよね」

「そうそう、まだ飛べない。もつたいない話しだ。あれだけの魔力があるのに」

「少佐、あつちゃんのストライカー候補。こんなのどーです？」

互いに顔を見て苦笑いをしていた歩く二人に掛かったのは、シャーリーの声だった。

片手に大きな雑誌と、片方に手紙を持って。

補給空走のために先に基地に戻り、そのまま飛ぶ事なくネウロイが散ったため、基地に留め置かれていたシャーリーは溜まっていた手紙の整理をしていた。

その手紙にあつたスライカーの話と、それがすでに実用段階にある事を載せた雑誌を持ち寄っていた。

「大きいな、それに数字だけみれば随分と高い所を飛ぶ……Be—29スーパーフォレストか」

見開きに映し出されたスライカーユニット、塗装のされていない銀色に輝くそれは、普通のユニットより幾分か大きかった。

一言では現す事のできない異様の姿を坂本は見つめて言った。  
「ここに運べるのならば使おう」と。

「魔法少女は挫けない……」

基地に戻った敦子は、部屋に戻った後布団を頭から被ったまま泣いていた。

大人になって、これ程の恥辱を受けなければ成らなかつたのは初めてだった。

「どんな試練を越したら……飛べるのよ。ていうかももう本当に死なせてよ、この天国から私を解放しろおおお!!!」

しばらくは立ち直れないと、自分の心に楔を打ってベッドの中に沈んだ敦子だったが、翌日にはそんな気持ちを無視して、空へと駆け上がるという事件が発生するのであった。